平成３０年度
文部科学省委託「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」

家庭教育や地域の教育との関わりを踏まえた教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動の在り方に関する研究

－私立幼稚園における教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動の現状と課題－

平成 31 年 3 月
公益財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

目次

はじめに 2
Ⅰ．　研究の目的（概要） 3
Ⅱ．　研究の内容と方法 4
１．研究の内容 4
（１）預かり保育の実施状況調査 4
（２）預かり保育の内容・質に関する調査 4
２．研究の方法 4
（１）質問紙調査 4
（２）質問紙を踏まえた事例収集 4
Ⅲ．　研究の結果 5
１．質問紙調査：預かり保育の実施状況調査 5
（１）園の基本的事項 5
（２）預かり保育の現状 5
（３）預かり保育の計画の作成 9
（４）教育時間と預かり保育の連携 13
（５）過ごし方（クラスの編成） 19
（６）記録の実際と活用 23
（７）配慮事項 30
（８）家庭との連携 35
（９）地域との連携 40
(10) 質を改善する視点と取り組み 43
(11) 課題と今後の取り組み 44
２．質問紙調査を踏まえた事例収集 48
Ⅳ．　研究のまとめ 61
１．研究結果から分かること 61
２．幼稚園における預かり保育の在り方 63
３．課題と展望 65
おわりに 66
参考 質問紙調査用紙 67

はじめに

私立幼稚園では幼稚園教育要領や補助制度に位置付けられる以前から、各幼稚園における地域や家庭の実情に応じて、教育課程に係る教育時間の終了後に限らず、様々なかたちで教育活動や家庭支援を行ってきた歴史があります。

平成１７年１月に中央教育審議会幼児教育部会の答申において発達の連続性の重要性が示され、乳児期から小学校就学へとつながる縦軸の連続性と共に、一日や一週間という生活のサイクルにおける横軸の関係の見直しが指摘されました。その後、乳幼児期の子どもの発達を保障する観点から、教育課程に係る教育時間とその周辺の時間のつながりは、一層重要度を増してきています。

さらに、子ども子育て支援新制度が平成２７年４月に施行されて以降は、２・３号認定子どもの通常利用の保育標準時間が１１時間となり、保育所や認定こども園を利用する、施設利用時間（在所時間）が長時間化しているように思います。一方、幼稚園等でも社会の変化による家庭や地域のニーズに対応していく中で、いわゆる預かり保育の在り方について、見直す必要性が自覚され各幼稚園で具体の取組が進みつつあります。

これらの状況を鑑み、この度、私立幼稚園における教育課程に係る教育時間終了後等に行う教育活動（いわゆる預かり保育）に着目し、全国の私立幼稚園等を対象に実態調査を行い、現状と課題について研究することとしました。本調査研究では運営形態等の外形的な調査にとどまらず、その計画と実践、それぞれの園の課題について調査検討するものです。本調査研究はこの分野の検討の入り口と考え、現状把握と課題抽出を目的として行い、今後のさらなる検討に貢献したいと考えています。

公益財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構
理事長　東　重満

Ⅰ．　研究の目的（概要）

本研究事業は、教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動(以下「預かり保育」という)の在り方について、家庭教育や地域の教育との関わりを踏まえて検討すると共に、私立幼稚園等（以下「幼稚園等」という）において「預かり保育」がどのように実施されているか実態調査することで現状と課題を明らかにし、「預かり保育」の教育活動としての更なる充実を図ろうとするものである。

これまで本財団では、教育課程に係る教育時間に行う教育活動の質向上を目指し、学校評価の推進に関する研究を積み重ねてきた。本財団が開発したECEQ(イーセック)(公開保育を活用した幼児教育の質向上システム)を幼稚園等で実施することにより学校評価の質が高まり、その結果、教育課程に係る教育時間に行う教育活動の質が高まるといった成果を得ることができた。一方、教育課程に係る教育時間の終了後に行う教育活動については、平成24年度に本財団が私立幼稚園を対象に行った実態調査において多くの幼稚園で実施しているとの回答を得たが、それ以降も「預かり保育」を利用する園児数や実施日数・時間数は増加の傾向にあると考えられる。本来、幼児の成長は、家庭教育、地域の教育、学校教育によって支えられ促されるものであるが、我が国においては核家族化の進行による子育て不安、共働き家庭の増加などの社会の労働環境の変化、地域における連帯感の希薄化等による家庭や地域の教育力の低下等が顕著になってきており、家庭、地域と幼稚園等がより連携を深めていくことがますます必要となってきている。したがって、家庭教育や地域の教育との関わりを踏まえた「預かり保育」の在り方を検討することは重要な課題である。

また、幼稚園教育要領において、「預かり保育」は教育課程に基づく活動との関連を図りつつ、幼稚園の開園時間から閉園時間までを視野に入れた一日の幼稚園生活を見通しながら実施することとしており、実施上の留意事項も示されているが、その実施については個々の幼稚園等に委ねられている部分が大きい。しかし、「預かり保育」は、幼稚園等における教育活動として適切な活動となるようにすることが大切であることから、個々の幼稚園等に委ねるだけでなく、本財団としても研究を進め、「預かり保育」の計画の作成や実施上の留意点、実施体制の工夫等、研究で得られた知見を幼稚園等に伝えていくことが必要である。

Ⅱ．　研究の内容と方法

１．研究の内容

（１）預かり保育の実施状況調査

私立幼稚園における「預かり保育」の実施状況について調査する。具体的には、園の属性として、学級数・園児の人数、園の運営形態（私学助成を受ける幼稚園・施設型給付を受ける幼稚園・幼稚園型認定こども園)、について調査する。また、預かり保育の実施状況として、預かり保育実施の有無、預かり保育の補助（従来の私学助成型・新制度一時預かり事業)、受け入れ人数、実施日数、実施時間、担当者の配属状況（人数・免許資格）を把握し、実態をもとに実施状況の調査を行う。

（２）預かり保育の内容・質に関する調査

質問紙調査における記述内容から、教育時間と預かり保育がどのような繋がりをもっているのか、子どもへの心身への配慮がどのようになされているのか、家庭や地域とどのように連携しているのかなど預かり保育の質に関わる事項の実施の有無や実施上の園の考えについて調査を実施する。また、預かり保育を実施するにあたって、各園が重要視しているポイントや課題、実際の取り組みの事例についても調査を行う。

２．研究の方法

（１）質問紙調査

・預かり保育の実施状況調査
・預かり保育の内容・質に関する調査

〈調査対象〉

調査対象園の選定にあたっては、全国の私立幼稚園（私学助成園・施設型給付を受ける幼稚園・幼稚園型認定こども園）を対象とした。また、都道府県の現状で私学助成園・施設型給付を受ける幼稚園・幼稚園型認定こども園の園数の違いがあることから、都道府県各加盟団体で調査園を抽出後選定した。

全国の私立幼稚園 300 園を対象とし、273 園からの回答を得た（回収率 91%)。なお、園数の合計は欠損値により、問いによって変動する。割合の算出は、欠損値を除いた有効%とした。

＜調査方法＞

預かり保育の実態と内容についての質問項目を平成 24 年実施の調査と幼稚園教育要領（文科省,2017）の内容を踏まえると共に、各地域・園の実情に合わせどのような預かり保育の工夫や配慮がされているのかなどを聞き取ることができるよう質問項目を設定した。回答については、Web 上での回答方式をとった。

＜分析方法＞

質問紙の問いに沿って、数値データについては、統計処理をした。また、自由記述データについては、質的分析（佐藤,2008）を実施した。

（２）質問紙を踏まえた事例収集

調査によって把握した実態から得た好事例については、さらに面接調査を実施し、預かり保育の工夫や配慮についての詳細な事例収集を行う。

Ⅲ.　研究の結果

１．質問紙調査：預かり保育の実施状況調査

（１）園の基本的事項

①園の基本的事項

平均の学級数は 7.79 学級（表１）で、平均の園児数は 186.41 人である（表２）。

表１　平均学級数

	３歳児学級	４歳児学級	５歳児学級	合計
平均学級数	2.89 学級	2.45 学級	2.45 学級	7.79 学級

表２　平均園児数（平成 30 年 5 月 1 日現在）

	３歳児	４歳児	５歳児	合計
平均人数	59.93 人	62.79 人	63.70 人	186.41 人

②回答園の属性

設置形態の内訳は　私学助成園 60.07％（164 園）　施設型給付を受ける幼稚園 17.22％（47 園）　幼稚園型認定こども園 22.71％（62 園）である（表３）。

表３　回答園の運営形態

	園数	％
私学助成園	164	60.07
施設型給付を受ける幼稚園	47	17.22
幼稚園型認定こども園	62	22.71
合計	273	100

（２）預かり保育の現状

①預かり保育の実施の有無

預かり保育を実施している園が 98.90％（270 園）実施していない園が 1.10％（3 園）である（表４）。実施している園の累計は私学助成園 59.34％（162 園）施設型給付を受ける幼稚園 17.22％（47 園）幼稚園型認定こども園 22.34％（61 園）である。実施していない園の累計は私学助成園 0.73％（2 園）施設型給付を受ける幼稚園 0％（0 園）幼稚園型認定こども園 0.37％（１園）である（表５）。

表４　預かり保育の実施

	実施している	実施していない
回答件数	270 件	3 件
回答比率	98.90%	1.10%

表５　預かり保育の実施（運営形態別）

	実施している			実施していない		
	私学助成園	施設型給付を受ける幼稚園	幼稚園型認定こども園	私学助成園	施設型給付を受ける幼稚園	幼稚園型認定こども園
回答件数	162 件	47 件	61 件	2 件	0 件	1 件
回答比率	59.34%	17.22%	22.34%	0.73%	0.00%	0.37%

②預かり保育の実施形態
預かり保育の実施形態の内訳は　従来の私学助成型 65.19%（176 園）　新制度一時預かり事業 34.81%（94 園）である（表６）。預かり保育の実施形態の園の累計は、従来の私学助成型での私学助成園 56.67%（153 園）施設型給付を受ける幼稚園 3.33%（9 園）幼稚園型認定こども園 5.19%（14 園）、新制度一時預かり事業での私学助成園 3.33%（9 園）施設型給付を受ける幼稚園 14.07%（38 園）幼稚園型認定こども園 17.41%（47 園）であった（表７）。

表６　預かり保育の実施形態

	従来の私学助成型	新制度一時預かり事業
回答件数	176 件	94 件
回答比率	65.19%	34.81%

表７　預かり保育の実施形態（運営形態別）

	従来の私学助成型			新制度一時預かり事業		
	私学助成園	施設型給付を受ける幼稚園	幼稚園型認定こども園	私学助成園	施設型給付を受ける幼稚園	幼稚園型認定こども園
回答件数	153 件	9 件	14 件	9 件	38 件	47 件
回答比率	56.67%	3.33%	5.19%	3.33%	14.07%	17.41%

③通常の教育日数と預かり保育実施日数（平成 30 年 6 月の実績）
平成 30 年 6 月に行った預かり保育の教育日数と預かり保育実施日数の平均は、教育日数 21.05 日、預かり保育実施日数は 21.01 日であった（表８）。

表８　通常の教育日数と預かり保育実施日数（平成 30 年 6 月の実績）

	平均
教育日数	21.05 日
預かり保育実施日数	21.01 日

④預かり保育の 1 日あたりの平均人数（平成 30 年 6 月の実績）
平成 30 年 6 月に行った預かり保育の教育日数と預かり保育の 1 日あたりの平均人数は年少 12.65 人・年中 15.13 人・年長 17.09 人・合計 44.88 人であった（表９）。

表９　預かり保育の 1 日あたりの平均人数（平成 30 年 6 月の実績）

	３歳児	４歳児	５歳児	合計
平均人数	12.65 人	15.13 人	17.09 人	44.88 人

⑤園児受け入れ開始の時刻（早朝預かりを含む）
※平成 30 年 6 月 18 日～平成 30 年 6 月 24 日の平均受け入れ時刻
預かり開始時間は 7 時 30 分以前が 100 園、7 時 30 分から 8 時 111 園、8 時から 8 時 30 分 39 園、8 時 30 分から 9 時 19 園、9 時以降が 1 園であった（表 10）。

表 10　早朝預かりを含む園児受け入れ開始の時刻

	～07:30	07:31～08:00	08:01～08:30	08:31～09:00	09:01～
回答件数	100 件	111 件	39 件	19 件	1 件
回答比率	37.04%	41.11%	14.44%	7.04%	0.37%

⑥預かり保育の終了時刻
※平成 30 年 6 月 18 日～平成 30 年 6 月 24 日の平均終了時刻
預かり終了時間は 16 時 30 分までが 10 園、16 時 30 分から 17 時 22 園、17 時から 17 時 30 分 35 園、17 時 30 分から 18 時 108 園、18 時から 18 時 30 分 62 園、18 時 30 分以降が 33 園であった（表 11）。

表 11　預かり保育の終了時刻

	～16:30	16:31～17:00	17:01～17:30	17:31～18:00	18:01～18:30	18:31～
回答件数	10 件	22 件	35 件	108 件	62 件	33 件
回答比率	3.70%	8.15%	12.96%	40.00%	22.96%	12.22%

⑦預かり保育担当従事者
※平成 30 年 6 月 29 日の実績値で記入（29 日が休園の場合 28 日）
幼稚園教諭免許のみ保持者常勤専任が 0.11 人、常勤兼任が 0.16 人、非常勤専任が 0.15 人、非常勤兼任が 0.07 人である。保育士資格のみ保持者常勤専任が 0.04 人常勤兼任が 0.01 人、非常勤専任が 0.08 人、非常勤兼任が 0.04 人である。幼稚園教諭免許・保育士資格保持者常勤専任が 0.88 人常勤兼任が 1.38 人、非常勤専任が 0.56 人、非常勤兼任が 0.46 人である。免許資格なしは常勤専任が 0.06 人常勤兼任が 0.07 人、非常勤専任が 0.17 人、非常勤兼任が 0.10 人である。預かり保育の保育者数は 4.34 人である（表 12）。

表 12　預かり保育担当従事者数

	幼稚園教諭免許のみ保持者		保育士資格のみ保持者		幼稚園教諭免許・保育士資格両保持者		免許・資格なし		合計	総人数
	常勤	非常勤	常勤	非常勤	常勤	非常勤	常勤	非常勤		
専任職員	0.11 人	0.15 人	0.04 人	0.08 人	0.88 人	0.56 人	0.06 人	0.17 人	2.05 人	4.34 人
兼任職員	0.16 人	0.07 人	0.01 人	0.04 人	1.38 人	0.46 人	0.07 人	0.10 人	2.29 人	

預かり保育の実施状況に関する考察

① 量・預かり保育のニーズに関する事項

調査から私立幼稚園の預かり保育実施率は 273 園で 3 園のみ実施していない園があり実施率は 98.9%であった。私立幼稚園では殆どの園で預かり保育を実施していることが明らかになった。文科省の調査における私立幼稚園での預かり保育実施状況は平成 28 年で 96.5%であることを踏まえると、今回の結果はほぼ文科省の調査結果と同じ（さらに増加の傾向）であることがわかる。

1 園あたりの平均園児数（教育課程時間）は 186.41 人で、1 日平均 44.88 人の園児の預かり保育をしている。この人数は文科省の平成 28 年度の調査結果（私立幼稚園 1 園 1 日あたり 20.8 人）の 2 倍である（ただし、調査対象園数が異なるため単純に比較して増加しているとは言えない）。平均園児数と 1 日当たりの預かり利用平均人数からの割合は 24%の園児が預かりを利用していることがわかる。

1 ヶ月あたりの保育日数については、6 月保育日数と預かり保育実施日数の平均から、幼稚園を開園した日は預かり保育を実施していることがわかった。時間については早朝の預かりは 7 時 30 分以前から 8 時までが 78.15%であった。預かり終了時間も 17 時 30 分から 18 時 30 分以降が 75.18%である。預かり開始時間と終了時間から長時間開園していることが分かり、地域の実情に合わせて預かり保育を実施していることが考えられる。

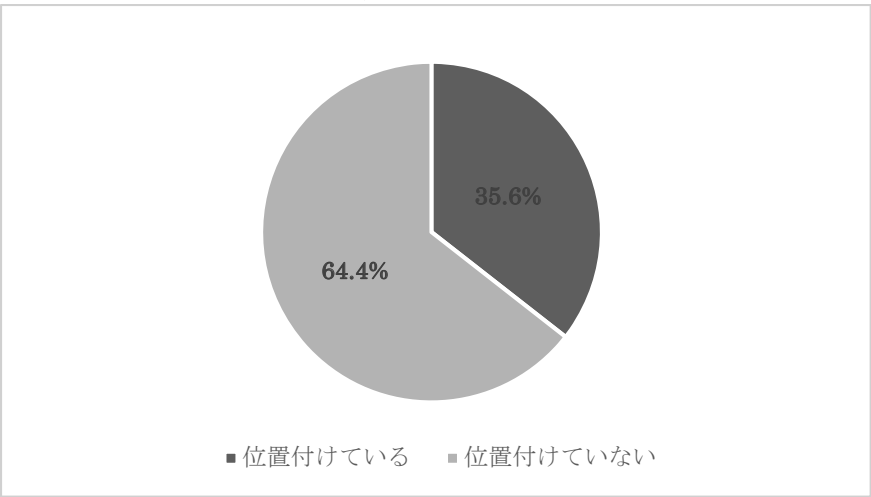
② 質に関する事項

預かり保育担当従事者は、殆どが幼稚園教諭免許状もしくは保育士資格を持つ、または併有している。なかでも、幼稚園教諭免許と保育士資格を併有する者の割合が最も多く、預かり保育においても免許資格を持つ者を配置することで質の担保を図っていることが伺える。また、従事者 1 人あたりの園児の割合は 10.34 人（預かり保育の平均人数 44.88 人に対して、預かり保育従事者数 4.34 人）であり、1 学級の定員を 35 人とした場合と比較しても手厚い配置を行っているといえる。免許資格を保有する従事者の配置に加え、人数的にも手厚い預かり保育の環境を整えていることが示唆される。

（３）預かり保育の計画の作成

預かり保育を実施する上での計画の作成の実態と意識について尋ねた。質問項目は、「年間指導計画は全体的な計画に位置付けているか」「年間計画を作成しているか」「月案を作成しているか」「週案を作成しているか」「日案を作成しているか」「計画の作成にあたり意識していること」である。

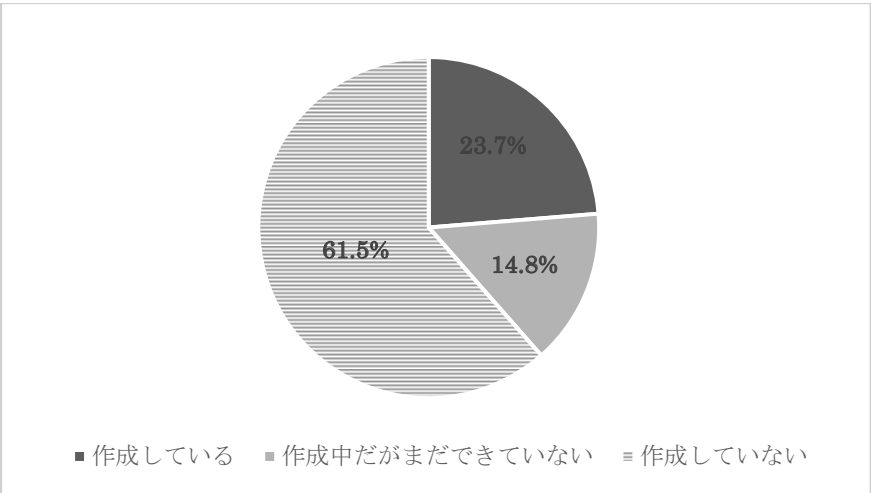
(3)-1　年間指導計画は全体的な計画に位置付けているか【設問 3-(1)-1】



図(3)-1　年間指導計画は全体的な計画に位置付けているか

「(預かりの) 年間指導計画を、全体的な計画に位置付けているか」について訪ねた質問では、位置付けていると回答した園は 35.6%（96 園）であった。

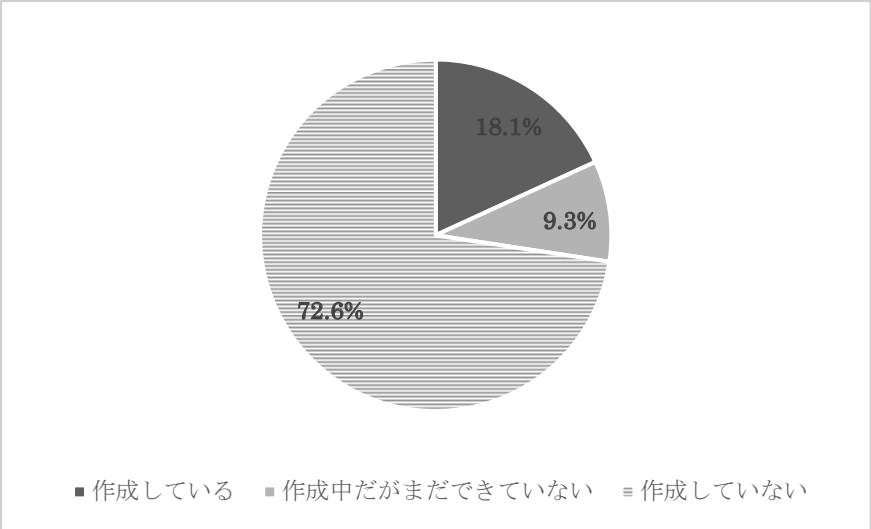
(3)-2　年間指導計画を作成しているか【設問 3-(1)-2】



図(3)-2　年間指導計画を作成しているか

「(預かりの) 年間指導計画を作成しているか」について訪ねた質問では、作成していると回答した園は 23.7%（63 園)、作成中だがまだできていない園は 14.8%（40 園）である。なお、園児数が多いほど預かりの年間計画を作成している（～90 人（3.7%），91～150 人（4.07%），151～210 人（5.93%），211 人～（10.0%))。また、預かり日数や預かり時間が長いほど作成されている。

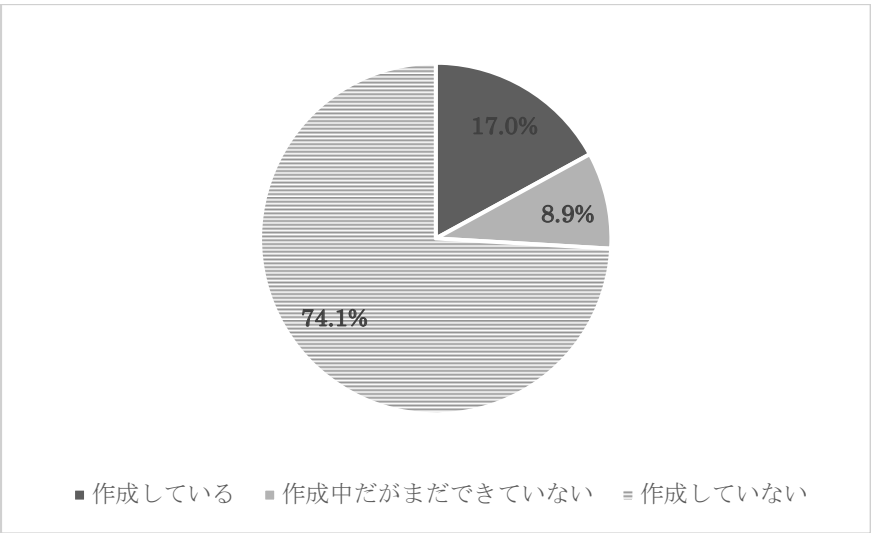
(3)-3　月案を作成しているか【設問 3-(1)-3】



図(3)-3　月案を作成しているか

「(預かりの) 月案を作成しているか」について訪ねた質問では、作成していると回答した園は 18.1%（49 園)、作成中だがまだできていない園は 9.3%（25 園）である。なお、園児数が多いほど月案を作成している（～90 人（1.85%）,91～150 人（2.22%）,151～210 人（5.19%）,211 人～（8.89%))。そして、日数・園児の割合・時間の長さが高い園ほど作成されている。

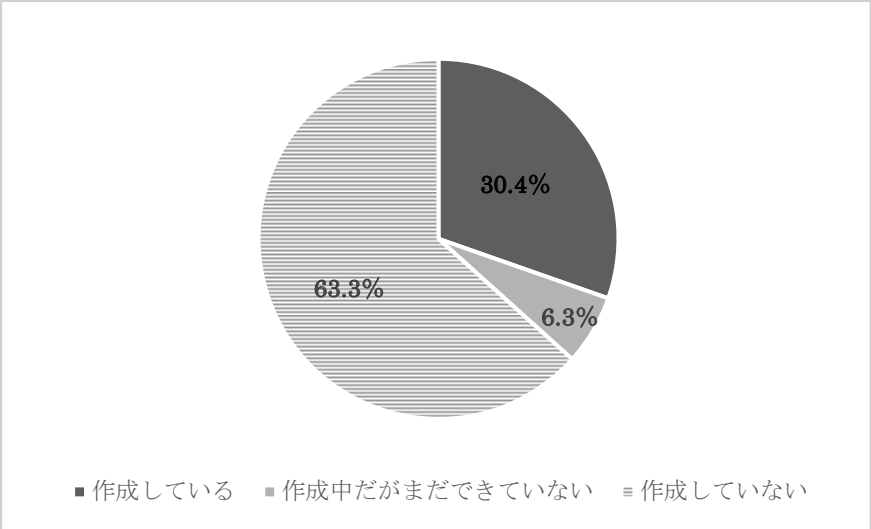
(3)-4　週案を作成しているか【設問 3-(1)-4】



図(3)-4　週案を作成しているか

「(預かりの) 週案を作成しているか」について訪ねた質問では、作成していると回答した園は 17.0%（46 園)、作成中だがまだできていない園は 8.9%（25 園）である。なお、園児数が多いほど週案を作成している（～90 人（2.22%）,91～150 人（2.59%）,151～210 人（4.07%）,211 人～（8.15%))。そして、日数・園児の割合・時間の長さが高い園ほど作成されている。

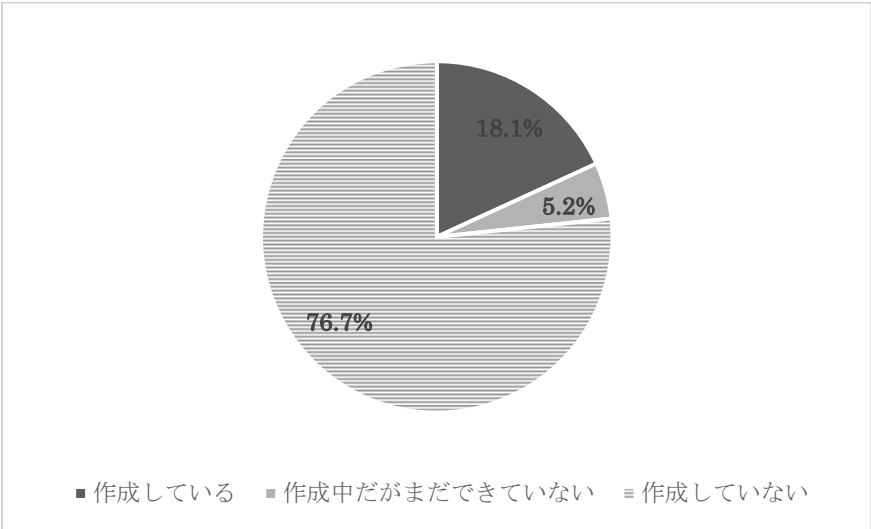
(3)-5　日案（週日案を含む）を作成しているか 【設問 3-(1)-5】



図(3)-5　日案（週日案を含む）を作成しているか

「(預かりの）日案（週日案）を作成しているか」について訪ねた質問では、作成していると回答した園は 30.4%（82 園)、作成中だがまだできていない園は 6.3%（17 園）である。日案が作成されている割合は年間・月案・週案が作成されている割合と比べると高いことがわかった。また、預かり人数が多いほど日案を作成している（全園児数中の 1 日あたりの預かり人数が､1 割未満の園の 26.2%, 1 割以上 5 割未満の園の 33.3%, 5 割以上の園の 50.0%で作成)。

(3)-6 特別な配慮が必要な幼児に対しての個別の指導計画を作成しているか【設問 3-(1)-6】



図(3)-6　特別な配慮が必要な幼児に対しての個別の指導計画を作成しているか

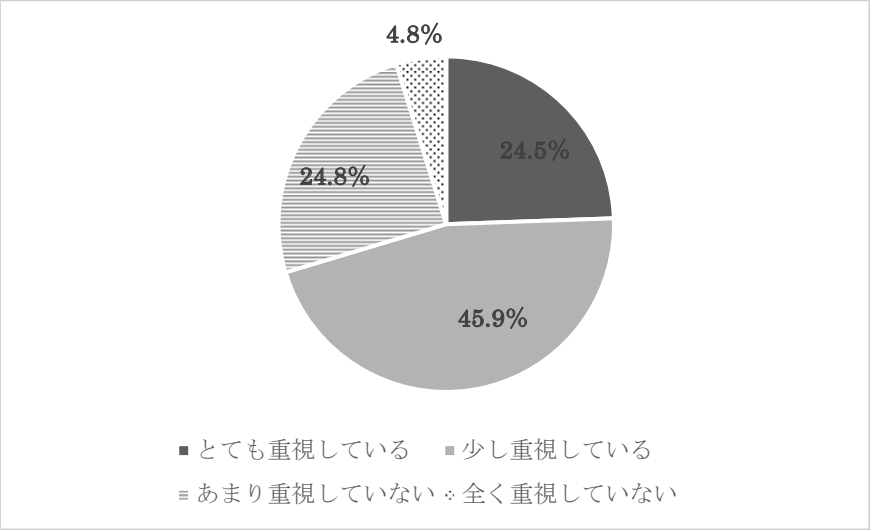
「特別な配慮が必要な幼児に対しての個別の指導計画を作成しているか」について訪ねた質問では、作成していると回答した園は 18.1%（49 園)、作成中だがまだできていない園は 5.2%（14 園）である。そして、預かり日数が多い園ほど作成している。また、預かり人数の割合が高いほど作成している（全園児数中の 1 日あたりの預かり人数が、1 割未満の園の 14.2%, 1 割以上 5 割未満の園の 21.4%, 5 割以上の園の 33.3%で作成)。

(3)-7 預かり保育の計画作成と預かり保育担当者の免許・資格の保有者数の関連

免許資格が預かり保育の質の一端を担保しているという視点から、預かり保育の計画が作成されているかどうかと、預かり保育担当者の資格・免許の保有者数との関連について検討することとした。預かり保育担当者の資格・免許の保有者数と、預かり保育の計画との相関関係についてノンパラメトリック検定を実施したところ、年間の計画・月案・週案の計画の作成度合いは資格保有者の数と正の相関がみられた(年間計画:幼保 $r=.165^{**}$ $p<.007$、幼 $r=.206^{**}$ $p<..001$ 保 $r=.179$ $p<.003$ 月案:幼保 $r=.186^{**}$ $p<.002$、幼 $r=.222^{**}$ $p<.000$、保 $r=.177^{**}$ $p<.003$ 週案:幼保 $r=.135^{*}$ $p<.027$、幼 $r=.155^{*}$ $p<.011$、保 $r=.124^{*}$ $p<.003$)。つまり、免許資格の保有者が多いほど年間計画・月案・週案は作成されていると言え、免許資格を保有している保育者が預かり保育を担当していることが、預かり保育の質の担保の一端を担っていると考えられる。

（４）教育時間と預かり保育の連携

(4)-1　教育課程に基づく活動と預かり保育は、１日の生活の流れとして捉えて実施するようにしている【設問 3-(2)-1】



図(4)-1　教育課程に基づく活動と預かり保育は、
１日の生活の流れとして捉えて実施するようにしている

「教育課程に基づく活動と預かり保育は、１日の生活の流れとして捉えて実施するようにしている」かどうかについての質問については、とても重視していると回答したのが 24.5%（66 園）、少し重視しているが 45.9%（124 園）、あまり重視していないが 24.8%（67 園）、全く重視していないが 4.8%（13 園）であった。「教育課程に基づく活動と預かり保育は、１日の生活の流れとして捉えて実施するようにしている」という設問に対する回答の理由（自由記述）を分析したところ、以下のような回答がみられた。

<u>重視している（とても重視している・少し重視している）群の回答</u>

まず＜教育時間とのバランス・子どもの生活リズムを考える＞については、体調や生活リズムへの配慮と静と動のバランスを取ることに最も重きが置かれていた。具体的な回答としては、例えば「教育時間にプールや身体を動かす活動が多かった場合、預かり保育ではゆったり過ごせるように考慮している。」

また、家庭にいるような環境で過ごすことや、子どもの精神的な負担がないようにすることを意識していると回答している園もみられ、「一日の終わりを過ごす場所として、考える様にしている。家に帰って、過ごすような家庭的な雰囲気で行っている。」「子どもの様子は、教育課程時と預かり保育で異なるため、預かり保育では家庭の雰囲気に少しでも近づけるよう配慮している。」といった回答があった。

＜教育時間における活動や経験とのつながりを考える＞ことについての記述については、まず、教育時間の活動と同じように活動できるようにすること、例えば行事や季節感のある遊び、教育時間内の活動や遊びを継続することについての記述がみられた（12.2%）。具体的な記述例としては、「園行事や各クラスの活動を遊びの一部として継続するようにしている。」「教育課程に基づく活動との連続性に配慮した環境構成。」「季節感のあるあそび（落ち葉拾い、松ぼっくりあそび、こま回し、なわとびなど）は教育時間の活動をさらに充実している」などがある。また、「一日の活動の中で、不足している領域を補うように心掛けている」「保育時間の活動を把握して、苦手なところを個別指導できたり、またリラックスできるようにする。」のように、教育時間で十分にできなかったことを補うことについ

て記述している園もあった（6.1%）。さらに、「教育課程の中の育ちを預かり保育でも引き継ぐような保育を取り組むよう指導している。」「どのような教育課程に基づく活動がその日にあったかということを把握したうえで、子どもの様子や興味・関心に合わせて遊びを提供したり援助をしたりすることを心がけている。」など、活動内容というよりは教育時間での経験が預かり保育での経験につながるような環境を整えることについての記述もみられた（7.5%）。その他にも、教育時間の育ちや経験を踏まえた計画の作成（3.4%）や、教育の方向性の確認（2.7%）といった記述もみられた。

＜保育者間（教育時間担当者・預かり保育担当者）の連携を考える＞ことについての記述については、「毎日の姿や成長など担任と共通理解し、同じ思いで子どもとかかわれるようにしている。」「預かり保育の職員が教育課程に基づく活動時間にフリーとして入ったり、担任と子どもたちひとり一人の出来事を伝達し合ったりしている。」「預かり保育担当者は預かり保育前は職員室勤務し、日々の教育内容を把握している。担任教諭との連携・連絡をとっている。」など、担当者間で子どもの姿を共通理解することや、預かり保育の職員が教育時間から一部子どもにかかわるなどという取り組みをしている園がみられた（6.8%）。

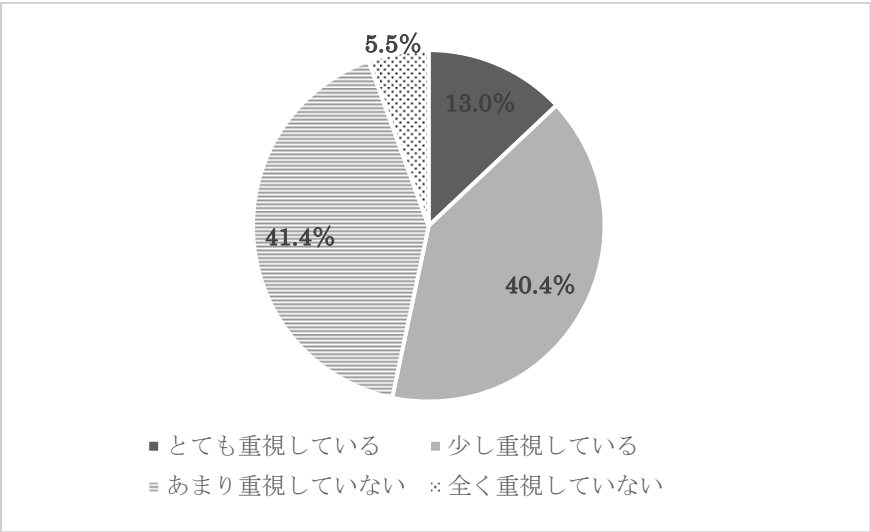
＜その他（3.5%）＞として、異年齢での活動や保護者との連携についての回答があった。

重視していない（あまり重視していない・重視していない）群の回答

重視していないと回答した園の回答をみてみると、重視していない理由として、教育課程とのバランス・子どもの生活リズムを考える（8.2%）ということが挙げられていた。例えば、「できるだけ家にいるような環境で自由に過ごしてもらうことが園の方針なので、教育時間とは分けて考えています。」「教育時間は社会生活の場、預かり保育は家庭のような場」という回答のように、教育時間と預かり時間を「全く別物」として考えており、預かり保育を「家庭」の代替であると考えていることを含め、教育時間と預かり時間のメリハリをつけることが、子どもの生活リズムを整えることや心身への配慮につながると考えている園が主であった。

その他に、異年齢での活動（1.4%）を挙げ、教育時間では経験できない関係性を経験させたいという園もみられる。

(4)-2　教育課程に基づく活動と預かり保育は、計画面で連携するようにしている
【設問 3-(2)-2】



図(4)-2　教育課程に基づく活動と預かり保育は、計画面で連携するようにしている

「教育課程に基づく活動と預かり保育は、計画面で連携するようにしている」かどうかについての質問については、とても重視していると回答したのが 13.0%（35 園）、少し重視しているが 40.4%（109 園）、あまり重視していないが 41.4%（111 園）、全く重視していないが 5.5%（15 園）であった。

「教育課程に基づく活動と預かり保育は、計画面で連携するようにしている」という設問に対する回答の理由（自由記述）を分析したところ、以下のような回答がみられた。

重視している（とても重視している・少し重視している）群の回答

まず、＜共通する活動や経験との連携＞（25.6%）については、教育時間の活動を預かり保育の時間でも実施していると回答があった（7.3%）。具体的には「通常保育で達成できなかったことを連絡し、補うことをしている。」「教育時間中の活動を行う」など、教育時間の活動と共通の内容を計画で意識していることについての記述がみられる。特に行事や歌に関しては、預かり時間の計画にも取り入れている園が目立つ（12.8%）。それから、教育時間の遊びや活動をそのまま実施するのではなく、その経験を生かして遊ぶことができるような環境構成や活動・遊びを行えるようにしていることについての回答も見られる（6.6%）。例えば、「遠足前後に、遠足にちなんだ保育活動をし、実際に遠足に行った時に子ども達が、さらに楽しめるようにする。」「平常保育での遊びや活動を踏まえ、その遊びを取り入れたり、別の角度からの活動を組み入れたりすることがある。」などの記述があった。

次に、＜教育時間の活動とは異なる預かり保育独自の活動を計画＞（12.8%）については、「家庭で過ごす園児がいる時間帯に預かり保育に来ているということを鑑み、家庭で行えるような内容も取り組んでいる。」のように、教育時間が動的な活動の時間だとすると、預かり保育の時間は静的な活動の時間だと捉えている園（5.5%）や、敢えて預かり時間だけに経験できるようなこと（活動・人間関係）を取り入れている園（3.7%）がみられる。

それから、＜教育課程や教育時間の指導計画を踏まえて預かり計画を立案している＞園も少なくない（10.1%）。預かり保育の指導計画を立案する際に、教育課程や教育時間の指導計画における子どもの発達に伴う経験（ねらい・内容）、環境などを踏まえることを意識した回答がみられた。＜その他＞として教育方針について共通で意識をする、発達の見通しを共有するといった回答もあった。

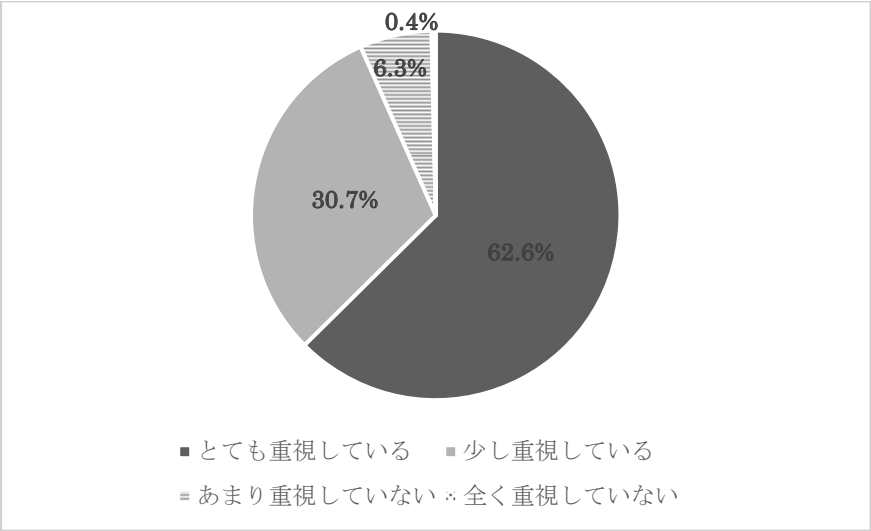
重視していない（あまり重視していない・重視していない）群の回答

「教育課程に基づく活動と預かり保育は、計画面で連携するようにしている」という設問に対して、「重視していない（あまり重視していない・全く重視していない）」と回答した園の理由（自由記述）を分析したところ、以下のような回答がみられた。

＜教育時間の活動とは異なる預かり保育独自の活動を実施＞していると答えた園（3.7%）や、＜その他＞（4.6%）として、預かり保育としての充実した環境、発達に応じた遊び、子どもが好きな遊びができるようにするという回答がみられた。このことからは、計画面での連携は重視されていない園でも、預かり保育の内容が充実するように意識はなされていたり、今後、計画面での連携を実施していきたいと考えている園もみられることがわかる。

それから＜連携が難しい＞と回答している園も少なくない（10.0%）。連携が難しい理由として、異年齢保育の実施、人数の多さ、利用人数の少なさ、利用する子どもが毎日変わるなどが挙げられており、利用する子どもの人数等が安定していないことで計画が立てづらいということがわかる。

(4)-3　教育課程に基づく活動から引き継いだ幼児の心と体の健康状態について知った上で、預かり保育を実施するようにしている【設問 3-(2)-3】



図(4)-3　教育課程に基づく活動から引き継いだ幼児の心と体の健康状態について知った上で、預かり保育を実施するようにしている

「教育課程に基づく活動から引き継いだ幼児の心と体の健康状態について知った上で、預かり保育を実施するようにしている」かどうかについての質問については、とても重視していると回答したのが 62.6%（169 園）、少し重視しているが 30.7%（83 園）、あまり重視していないが 6.3%（17 園）、全く重視していないが 0.4%（1 園）であった。

「教育課程に基づく活動から引き継いだ幼児の心と体の健康状態について知った上で、預かり保育を実施するようにしている」という設問に対する回答の理由（自由記述）を分析したところ、以下のような回答がみられた。

重視している（とても重視している・少し重視している）群の回答

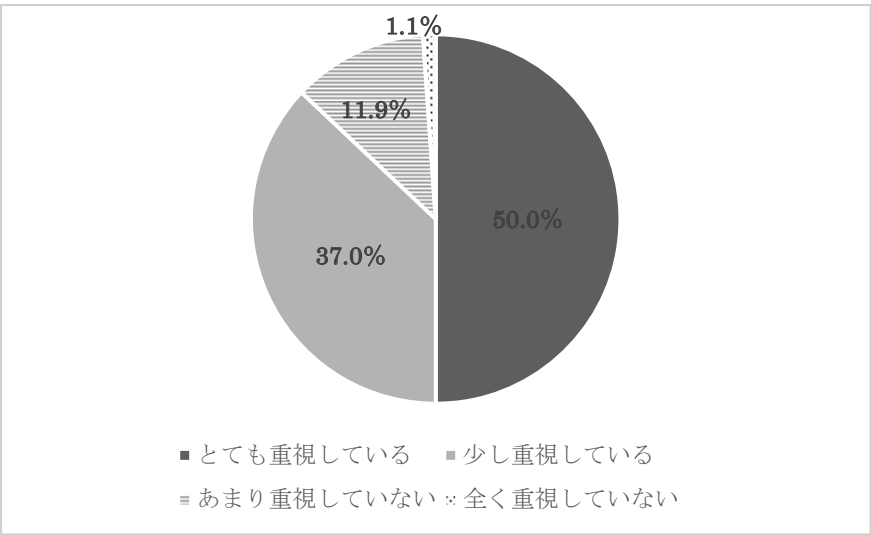
＜担当者間の情報共有＞（61.1%）が最も回答として多く、その中でも個別配慮事項の伝達に関する記述が最も多くみられた。伝達方法については、口頭での伝達が主であるが、メモや預かり用ノートなど文書での伝達を実施している園もみられる。内容としては、教育時間における怪我・体調不良・情緒の不安定さ・トラブルに加え、園児の持病やアレルギーなど、特に個別に配慮すべき事項があった場合、その情報を担任から預かり担当者に伝えるというものなどがみられた。発達や情緒面、家庭環境、保護者からの伝達事項について、情報共有を実施しているという園や教育時間の活動や遊びや、預かり保育を利用する園児全体の発達に関する情報を伝達し、預かり保育の内容や保育上の配慮に生かすという記載がみられる。さらに、情報共有の方法として、密に情報交換を行っていると回答した園もあり、毎日の打ち合わせ（連絡協議会）を行っているという記述や、預かり担当者が教育時間は職員室勤務をするという記述もみられた。それから、＜全職員間の情報共有＞について記述した園は２園と少ないが、教育時間担当者・預かり担当者を含めた全職員でのケースカンファレンスを実施しているという記述もあった。

そのほかにも、＜預かり保育に担任が入ることや様子を見る＞（3.0%）子どもの様子によっては、担任が保育に入ったり、子どもの様子を見に行ったりすることがあるという記述があった。また、＜子どもの様子を意識的に観察する＞ 特に健康状態への配慮から、複数の目で把握するようにしたり、よく観察するようにしているという記述や、＜保育内容への配慮＞として保育内容について、体調や体力などその日の状態に応じて活動を決めたり、活動の緩急をつけたりしているという園もあった。

重視していない（あまり重視していない・重視していない）群の回答

重視していない（あまり重視していないのみ）園の数は全体の 6.7%（18 園）と少ない。また、重視していないからといって行っていないわけではなく、担当者間の情報共有や保育内容について配慮しているという記述がみられる（2.4%）。

(4)-4 預かり保育での活動内容や心と体の健康状態について、翌日の教育課程に係る教育時間の保育者に引き継ぐようにしている【設問 3-(2)-4】



図(4)-4　預かり保育での活動内容や心と体の健康状態について、
翌日の教育課程に係る教育時間の保育者に引き継ぐようにしている

「預かり保育での活動内容や心と体の健康状態について、翌日の教育課程に係る教育時間の保育者に引き継ぐようにしている」かどうかについての質問については、とても重視していると回答したのが 50.0%（135 園）、少し重視しているが 37.0%（100 園）、あまり重視していないが 11.9%（32 園）、全く重視していないが 1.1%（3 園）であった。

「教育課程に基づく活動から引き継いだ幼児の心と体の健康状態について知った上で、預かり保育を実施するようにしている」という設問に対する回答の理由（自由記述）を分析したところ、以下のような回答がみられた。

重視している（とても重視している・少し重視している）群の回答

まず、＜伝達内容＞として気になることや伝達が必要なことを伝えるという記載が最も多く、記載の 46.4%を占めている。子どもの体調・体力面をはじめとして、子ども同士のトラブルや情緒的に不安定な様子などがあった場合に、教育時間の担当教職員に引き継ぐという回答がみられた。活動の様子やエピソードなど、子どもが預かり保育で過ごしている時の様子（経験として教育時間とつながること）や発達について情報共有するという園もみられる（7.1%）。預かり保育担当者が保護者と話した内容について伝達するという記述もみられた（2.9%）。

次に＜伝達方法＞としては、文字記録や口頭での伝達が最も多く（17.9%）、アプリを利用している園もみられる。口頭の場合は、預かり担当から教育時間担当へと直接というだけでなく、会議や打ち合わせ、朝礼、終礼などで全員での共通理解を図るという園もあった。その日のうちに引き継ぎをするという記述もあれば、翌日伝えるという記述もみられる。

＜その他＞として、意識として、教育時間と預かり保育の時間で一貫性のある教育として考えているという園がみられた。預かり担当者と教育時間担当者との間の引き継ぎだけでなく、家庭との連絡について意識しているという記述もあった。

重視していない（あまり重視していない・重視していない）群の回答

重視していない（あまり重視していないのみ）園の数は 12.0%（35 園）と多くない。重視してない園の場合は、「特に」気になることがある場合は引き継ぎをしているという記述がみられた。

(4)-5 その他、連携で工夫していること（ある場合のみ記載）【設問 3-(2)-5】

連携で工夫していることとして以下のような記述が挙げられていた。

- 生活面・健康面・安全面等で問題が生じた場合は、担任と連携して対処している
- 配慮児ノートを作り、職員間で意識統一をしている
- 預かりノートに毎日担当者が気付きや様子を記入し引継ぎ、職員会などで問題提起をしている
- どの担当者も教育時間内において園児とのかかわりを持っている
- 異年齢で過ごしていることで、思いやりや遊びをリードするなど、お互いの良さが出るようにしている
- 子どもの様子を記録に残し、全職員で共有している
- 長期休業中の預かり保育では、指導計画を作成し、日案を作成している

教育時間と預かり保育の連携に関する考察

教育時間における活動や経験とのつながりを考え、預かり保育の活動内容を整えているとの記述が多くみられた。つながりを意識している園には、いくつかのパターンがある。これは預かり保育の計画を立てている、立てていないに関わらず多くの園で意識されていることである。

まず、教育時間の活動や遊びと預かり保育の活動や遊びの静と動のバランスを考えている園が最も多い。教育時間においては設定活動（行事の準備などを含む）などで動的な活動が多いために子どもの心身への配慮から、預かり時間は落ち着いて過ごしてもらうという考え方が最も多くみられる。預かり時間は幼稚園にとっては本来家庭ですごす時間であることから、預かり保育は家庭的なものとしたいという教育的信念で設定している園が多かった。

次に、「教育時間で行った活動や遊びを、預かり保育の時間において子どもの自由な選択や自発性を重視しながら行う」、つまり、教育時間と同じ活動をするというよりは、教育時間で行なった活動に関する環境を準備しておく、クラス活動でしたことを別の角度から経験できるようにするなどしている園がみられる。教育時間が教育課程との関連の中で子どもに必要な経験を園や教職員の明確な意図のもとに実現されていくのに対して、預かり時間は教育時間の子どもの経験をゆるやかにつなげることで教育を実現させていこうと考えていることが示唆される。

計画面の連携でも、教育時間の遊びや活動をつなげるだけでなく、その経験が生かせる環境構成や活動を工夫している園が多くみられた。それから、数はかなり少ないが預かり時間を教育時間の補修的な時間として考えている園もみられた。

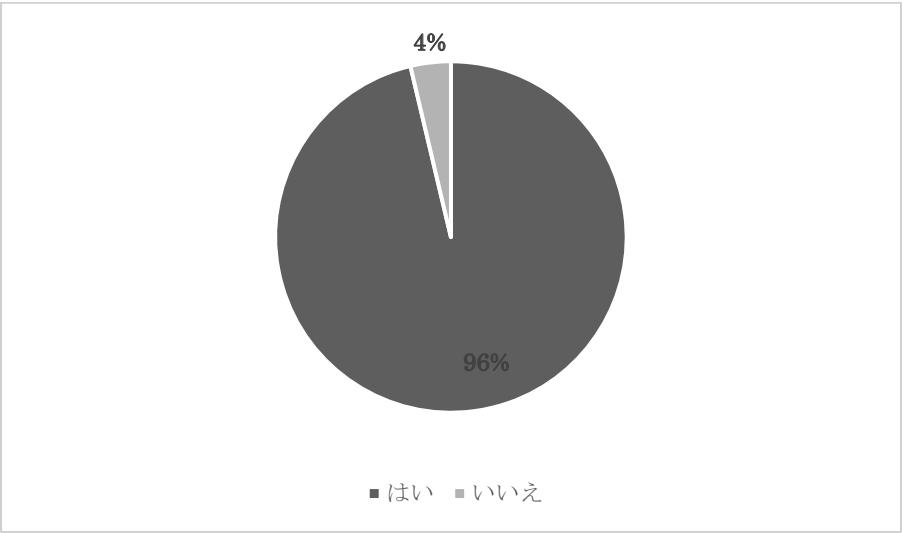
また、重視していない園でも、預かり保育を「家庭」の代替であるという考えや、体調や生活リズムに配慮したり静と動のバランスを考えている園がみられた。また、預かり保育だけの経験をさせたいので、敢えて教育時間とは別に考えている園もみられたり、異年齢の活動を行なっているので教育時間とは別の時間として考えるという園もある。

また園児の心と体の健康状態の伝達方法も、日誌やメモ等で漏れが無いように配慮しており、伝える内容は主に健康状態や怪我など身体に関わることが多かった。

（５）過ごし方（クラスの編成）

預かり保育を実施する上で、どのようなクラス編成をしているかについて尋ねた。質問項目は、「異年齢保育の実施」「学年別での保育の実施」「集団の大きさとクラス分け」についてである。

(5)-1　異年齢保育の実施【設問 3-(3)-1】



図(5)-1　異年齢で過ごしている

「異年齢で過ごしている」かどうかについて尋ねた質問では、異年齢で過ごしていると回答した園は 260 園（96%）であった。(図(5)-1)

異年齢で過ごしている園にその理由を自由記述で尋ねたところ、230 園から回答があった。異年齢で過ごしている理由を分析したところ、＜子どもの経験のため＞＜運営状況や課題＞が主な理由として挙げられていた。

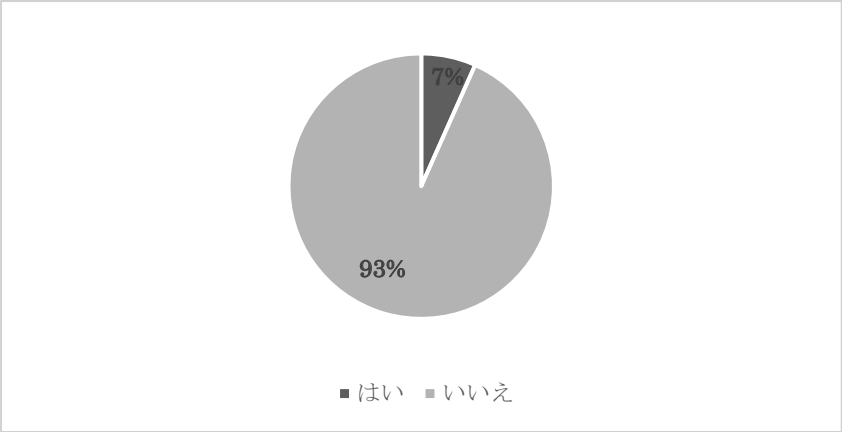
＜子どもの経験のため＞と考えている園は、理由を回答した園のうち 45.9%であった。内容としては、家庭的・兄弟的な関係や雰囲気の経験や縦のつながりの経験をさせたいというものが最も多かった。具体的な例としては「家庭的な雰囲気を味わわせたい。」「思いやりや助け合いの心が育つ。」「お互いの刺激になり、学びがある。」「学年やクラスの活動では体験できない関わりがある。」「地域の子どもたちの集団遊びのような経験になる。」というような回答が記述されている。

少子化で兄弟が少ない、地域社会のつながりの弱まりなどの課題があるなかで、幼稚園の教育時間は学年で過ごすことが多いことから、預かり保育では異年齢で過ごさせたいと考えていると推察される。全体的に読み取れることは、異年齢で過ごすことによって、互いの学びや人間関係の広がり、思いやりや助け合いなどが育つことを大切にしていると考えられる。

そして、＜運営状況や課題＞を異年齢で過ごす理由として挙げた園が 52.5%あった。預かり保育の人数が少ない、日により利用する子どもの数が変わるなどということがあり、学年別で過ごす必要を感じていないという理由が最も多かった。しかし、子どもの人数との関係で、保育者の確保や配置、保育室の課題なども上がっており、手厚く配置したいが、保育者の不足や補助金の問題などで、まとめて異年齢で保育をせざるを得ないと考えている園もある。

それから、子どもの年齢による経験や安全性の確保のために、通常から利用人数が多い園や長期休業中など人数の多いときには学年別で過ごし、夕方に少人数になってから異年齢で過ごすようにしている園もあった。

(5)-2　学年別での保育の実施【設問 3-(3)-2】



図(5)-2　学年別で過ごしている

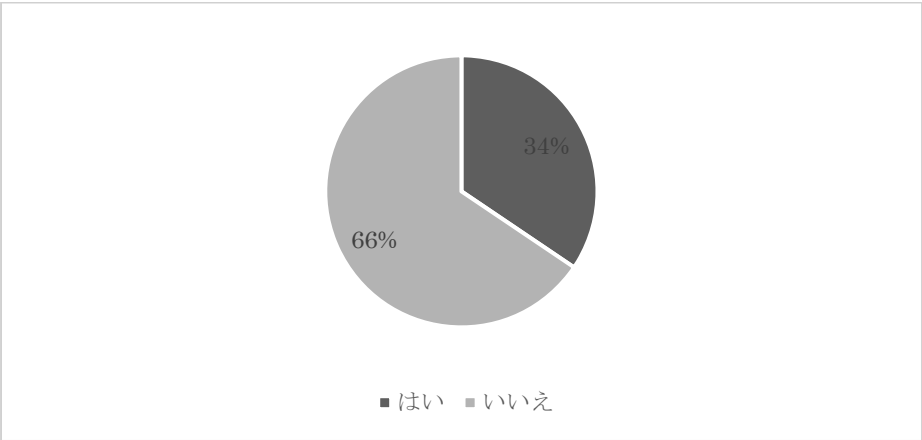
「学年別で過ごしている」かどうかについて尋ねた質問では、学年別で過ごしていると回答した園は 7%（10 園）であった。(図(5)-2)

学年別で過ごしている園にその理由を自由記述で尋ねたところ、19 園から回答があった。学年別で過ごしている理由を分析したところ、＜子どもの経験のため＞＜運営状況や課題＞が主な理由として挙げられていた。

＜子どもの経験のため＞と考えている園は理由を回答した園のうち 47.3%であった。内容としては、落ち着いた雰囲気の中で安心して過ごせるように、しっかり一人一人とかかわれるようにという子どもの情緒に関する記述と、発達に応じた経験や活動をさせたいという記述がみられた。具体的な例としては、「落ち着いた雰囲気の中で、安心して過ごすことができるように」「遊びの内容が学年によって違う」「遊びの質の違いがある」「子どもたちの活動や体力が違う」というような回答が記述されている。

＜運営状況・課題＞を学年別で過ごしているという理由としてあげた園は、人数が多いためと記述しているほか、具体的にどのようにクラス分けをしているのかという記述も見られた。具体的な例としては、「人数が多い」「長期休業中のみ（人数が多くなる)」「満 3 歳児、3 歳児、4 歳児、5 歳児の 4 クラスにしている」「年少組と年中長組に分けている」「毎日、大体 16：30 まで」「夕方まで分かれて、人数が少なくなると異年齢で集まっている」というような回答が記述されている。園児数が多い場合に学年別に分かれて保育しているところが多い傾向が見られた。

(5)-3　集団の大きさとクラス分け【設問 3-(3)-3】



図(5)-3　2 クラス以上に分けて、生活する集団が大きくならないようにして過ごしている

「2 クラス以上に分けて、生活する集団が大きくならないようにして過ごしている」かどうか尋ねた質問では、2 クラス以上に分けて預かり保育を実施している園は 34%（93 園）であった。(図(5)-3)

2 クラス以上に分けて、生活する集団が大きくならないようにして過ごしている園にその理由を自由記述で尋ねたところ、80 園から回答があった。2 クラス以上に分けて、生活する集団が大きくならないようにして過ごしている理由を分析したところ、＜子どもの経験のため＞＜運営状況や課題＞が主な理由として挙げられていた。

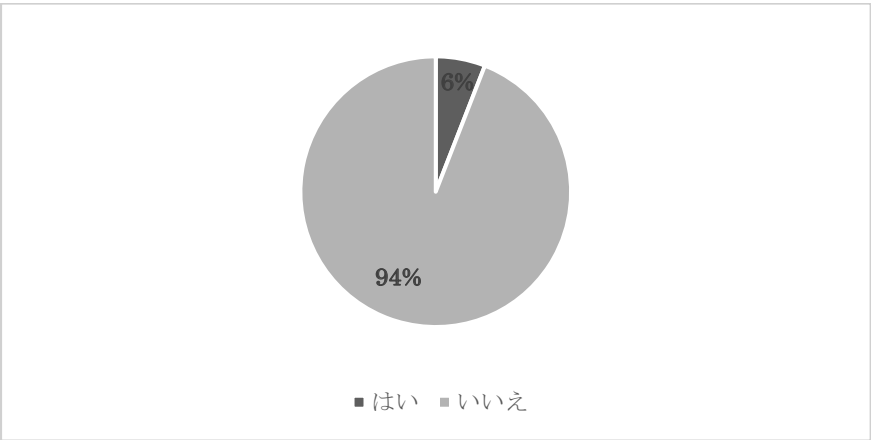
2 クラス以上に分けている理由を挙げた園のうち＜子どもの経験のため＞と答えた園は 55.6%であった。理由として、保育者が十分な対応、一人一人に応じた丁寧なかかわりをするために少人数での保育が必要と考えて学年別にしている園が最も多かった。

また、安全や安心の確保のためには少人数で実施するのがよいと考える園が多く見られるほか、子どもが落ち着いて過ごすために、ゆとりをもって過ごせる人数にするためという園も多い。それから、発達により遊びの内容や体力が違うことから、それぞれがのびのび遊ぶことができるようにと考え、学年別で過ごしている園もみられる。具体的な例としては、「一人一人への関わりを大切にする」「安全面に配慮して」「落ち着いて過ごす」「年少児はお昼寝をする」というような回答が記述されている。

そして、＜運営状況や課題によって＞を理由として挙げている園は、理由を記述した園のうち 44.4%であった。預かり保育の人数が普段から多い園や、日や時期によって人数が多くなる場合などに学年別で過ごしている園が多く見られた。また、活動や時間帯によって、異年齢混合か学年別かを変えている園もみられた。それから、空間的に余裕のある園や、別棟で実施している園は、部屋やスペースがあるので学年別にしていると答えていた。

全体的な傾向として、預かり保育の園児数が多くなった場合に、安全面や活動面、スペースの関係などの理由で分けていることが多い。具体的な例としては、「人数が多い」「適切な人数（活動・時間帯・長期休業中など)」「年齢で分けている」というような回答が記述されている。

(5)-4　学童保育【設問 3-(3)-4】



図(5)-4　学童保育の児童と一緒に過ごしている

「学童保育の児童と一緒に過ごしている」かどうか尋ねた質問では、学童保育の児童と一緒に過ごしている園は 6%（16 園）であった。(図(5)-4)

学童保育の児童と一緒に過ごしている園にその理由を自由記述で尋ねたところ、15 園から回答があった。学童保育の児童と一緒に過ごしている理由を分析したところ、＜子どもの経験のため＞＜運営状況や課題＞が主な理由として挙げられていた。

＜子どもの経験のため＞でみれば、園児と小学生の交流のため、家族だと思える環境を作り出すため、すべての子どもに分け隔てなく保育をしていくためなど、園児と学童の児童

が共に過ごすことについての考え方は園により異なっているようである。具体的な例としては、「兄弟姉妹が多いため、一緒に過ごしている」「園児にも小学生にも、よい交流の場になっている」「当園に集まる子どもたちみんなが家族だと思える環境を作る」というような回答が記述されている。

＜運営状況＞面では、夏休みなどの長期休業時に預かっているという記述が最も多く、ほかに空いている部屋がないためなどの記述もみられる。具体的な例としては、「長期休業中、園児の兄姉や卒園生を預かっている」「卒園生など保護者の緊急時等に臨機応変に対応」「学童保育の利用人数が少ない」というような回答が記述されている。

これらの中には、恒常的に行っているところと、長期休業中や臨時的に園児の兄姉を預かっているところもみられた。

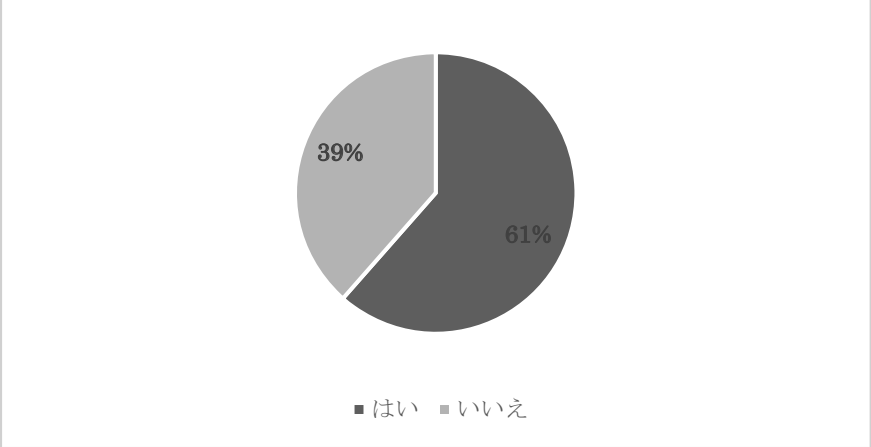
(5)-5　その他の形態で預かり保育を実施している

「その他の形態で預かり保育を実施している」かどうか自由記述で尋ねたところ、18 園から回答があった。学童保育の児童と一緒に過ごしている理由を分析したところ、＜子どもの経験のため＞＜運営状況や課題＞が主な理由として挙げられていた。

具体的な例としては、「人数が多いときや雨天等の場合は 2 クラスに分ける」「長期休業中は人数が増えるため学年ごとで分け、兄弟児には配慮」「一軒家なので、4 部屋と台所や庭がある。昔の祖父母宅で過ごしているような感じ」「月案に基づき教育的な活動を前面に出して、十分に教材研究を行い、内容を保護者に提示して前月に申し込みを受ける預かり保育と、当日の朝に受け付ける保護者の利便性を重視した預かり保育と、二本立てで行っている」「満 3 歳・年少、年中、年長、学童」で分けて行い、夕方園児数が少なくなると一つのクラスにまとめる」というような回答が記述されている。

（６）記録の実際と活用

(6)-1　預かり保育の活動が次の日につながる記録として利用【設問 3-(4)-1】



図(6)-1　預かり保育の活動が次の日につながる記録として利用

「預かり保育の活動が次の日につながる記録として利用」かどうか尋ねた質問では、預かり保育の活動が次の日につながる記録として利用している園が 61%（166 園）であった。(図(6)-1)

預かり保育の活動が次の日につながる記録として利用している内容を自由記述で尋ねたところ、83 園から回答があった。

そこで、預かり保育の活動が次の日につながる記録として利用している内容を分析したところ、＜記録内容＞と＜記録の活用＞に分類された。

＜記録内容＞を利用している具体的な例としては、「活動や遊びの内容を記入する」という記述が最も多かった。また、「預かり保育中の子どもの様子（どのように過ごしていたのか)」についての記述も見られた。その意図として、「翌日以降の遊びの継続につなげたい」「他の預かり担当者や教育時間の担当者が保育をする上での参考にしたい」というものがみられる。「子どもの心身の状態、特にトラブルや怪我、体調不良など、次の日の保育をする上で確認しておくべきことを記録しておく」という記述もみられる。「おやつや子どもへの配慮」についての記述もあり、特に「長時間利用やアレルギーなど翌日以降の保育でも意識しておくべき必要がある」ことが挙げられていた。「日々の預かり保育の反省・省察や話し合ったことを残している」という園もあった。その他に、「預かり保育の人数・降園時間」などの基本情報や、「保護者との連絡事項（保護者から園へ、園から保護者へ)、忘れ物」などについての記載をしていた。

＜記録の活用＞として最も多い回答は、「教育時間担当者が確認する」というもので、「子どもの理解」につなげたり、「気になる子どもの様子を伝えることで翌日の保育を意識」したりという回答がみられた。また、「全職員で共有している」という園もあった。「翌日以降の預かり保育の保育内容や環境を考えるために使う」という回答や、「計画に反映させる」という回答もみられた。

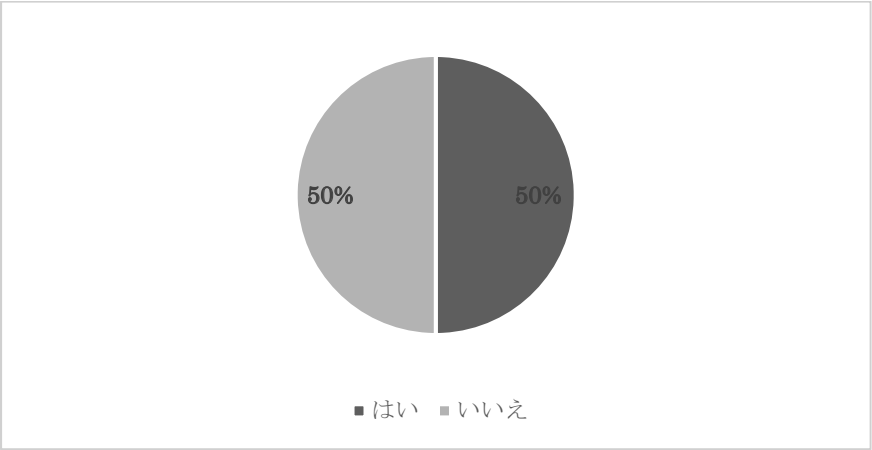
＜その他＞に、「長期休業期間中のみ記録をとっている」という園があった。また、「預かり保育の記録（日誌）は、利用した園児氏名とお迎え時刻を記録している」「具体的な遊びの内容を記入する」「けがやけんか、その他子どもたちの様子や健康状態の引き継ぎ」「次の日に活動の続きができるようにするため」「週案、日案へ反映させる」「日々の計画や記録を記載し、指導や個の様子の振り返りに活用している」「長期休業中は翌日以降の別担当者に伝達できるように記録している」「預かり保育での子どもの姿を担任に伝えることで子どもの姿がより見えてくる」「保護者からの連絡や手紙などの内容の伝達」「翌日の活動の

参考になっているとは思うが、預かり保育は希望者の利用であり、日々異なる子どもたちの利用なので、翌日につなげることが難しいこともある」というような回答が記述されている。

記録を利用していないという回答では、園児名と降園時間の確認のために記録をとっている園はあったが、多くは口頭で伝達していたり、利用人数が少ないなどの理由で記録をつけていなかったり、記録を活用していないということであった。利用していないという園でも、口頭やメモで随時連携がとられている。園の預かり保育の事情や考え方と関連があると推察される。具体的な例としては、「紙面での引き継ぎはないが、口頭で様子を伝えている」「通常保育の活動には直接つながらないと思うため」というような回答が記述されている。

全体的に、預かり保育の園児数割合が高い園の方が記録を利用している傾向がみられた。それらが、遊びの内容や心身の様子、保護者からの連絡など、翌日の活動につながるよう利用されている。

(6)-2　幼稚園全体の状況などを、預かり担当者へ引き継ぐために利用



図(6)-2　幼稚園全体の状況などを、預かり担当者へ引き継ぐために利用

「幼稚園全体の状況などを、預かり担当者へ引き継ぐために利用」しているかどうか尋ねた質問では、幼稚園全体の状況などを、預かり担当者へ引き継ぐために利用している園が 50%（135 園）であった。(図(6)-2)

預かり保育の活動が次の日につながる記録として利用している内容を自由記述で尋ねたところ、54 園から回答があった。

そこで、預かり保育の活動が次の日につながる記録として利用している内容を分析したところ、＜記録内容＞と＜記録の活用＞に分類された。

＜記録内容＞を利用している場合、幼稚園全体の状況などを、預かり担当者へ引き継ぐために利用している園が 50%（135 園）であった。

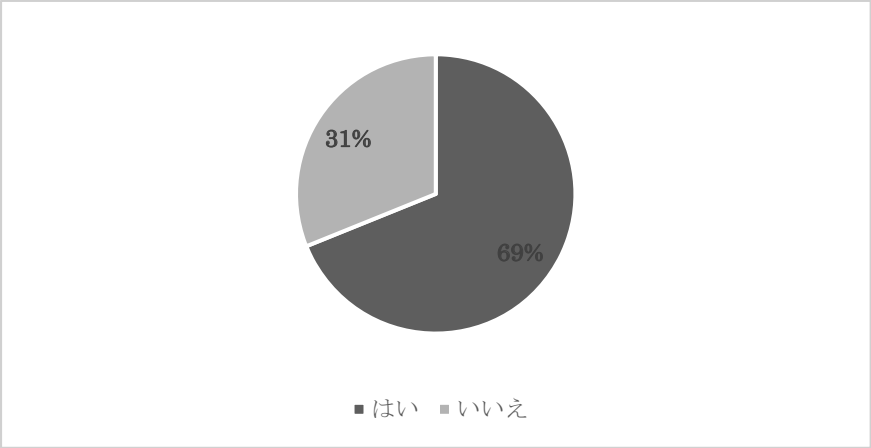
記録を利用している具体的な例としては、最も多い回答は「子どもの様子」である。「教育時間の子どもの様子を伝える」という回答もあれば、「子ども一人ひとりの特性や性格などを伝えて預かり時に関わる際の参考にしてもらう」という回答もみられた。また、「記録だけでなく、実際に教育時間の様子を見てもらう」という回答もみられる。「活動内容や行事を知らせる」という回答については、「教育時間の活動内容等を知らせることで、午後の預かりの過ごし方に生かしてもらう」というものである。「預かり保育の人数や降園時間などの情報」や、「保護者への伝達事項、保護者からの連絡」など、「家庭との連携」に関する事項について記載している園もみられた。「会議の記録」を書いておくことで、預かりの先生にも理解してもらいたいことを記載している園もあった。

具体的な例としては、「職員会議の内容を情報共有や資料の伝達」「その日の行事や活動内容を知らせ、預かり保育までの時間にどのような活動をしたか伝えることで、活動のつながりができる」「園だより、クラスだより、課外活動の手紙などを渡している」「感染症や行事などでの取り組み」「園内の環境（遊具、草花、樹木など）の変化や気づきの引き継ぎ」「行事などにより、預かり保育の出席者が増えることがあるので引き継ぎをする」「夏休み中など、預かり担当者の入れ替わりがある場合は特に活用している」というような回答が記述されている。

＜記録の活用＞やその他、別の伝達方法については、(6)-1 の回答と同様、口頭や日誌以外の文字記録での伝達などの記述がみられた。また、記録を利用していない園での、別の伝達方法については(6)-1 の回答と同様に口頭という記述が多くみられた。具体的な例としては、「必要なことは口頭やメモで伝えている」「職員会議を通して連絡を密にしている」「事務職員が窓口となり引き継がれている」「行事などは預かり保育担当者も参加する」「預かり保育担当も行事に参加する」というものがある。

全体を通して、預かり保育の園児数割合が高い園ほど利用している傾向がみられた。多くの園で、職員会議の内容の情報共有としてや行事への共通理解、園内環境の変化や気づき、感染症情報などについて引き継ぎがされ、教育時間との連携と関連して活用されていることが読み取れる。また、配布プリントなども添えて利用している記載がみられた。

(6)-3　安全管理の引き継ぎとして利用【設問 3-(4)-3】



図(6)-3　安全管理の引き継ぎとして利用

安全管理の引き継ぎとして利用している園は 69%（186 園）と、記録の活用方法としては一番高い割合である。(図(6)-3)

けがや事故、アレルギーや体調などについて、保護者や教職員間で伝達・共有するために利用している。またヒヤリハット事項なども園内で共有し、事故防止のために記載している。

安全管理の引き継ぎとして利用していないと答えた園も、口頭で伝達したり、別の引き継ぎ簿を使用したりしている記述がみられた。

安全管理の引き継ぎとして利用している記録として利用している内容を分析したところ、＜記録内容＞と＜記録の活用＞に分類された。

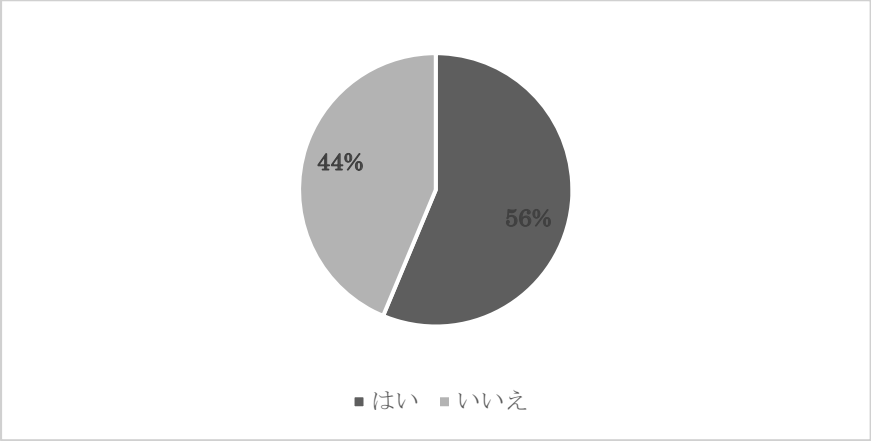
＜記録内容＞を利用している具体的な例としては、「環境の不具合」についての記載と「怪我や事故」についての記述が最も多い。「固定遊具や植栽などの危ない箇所などについて引き継ぎ」や、「教育時間での怪我などの預かり時間への引き継ぎ」「預かり時間の怪我を教育時間に引き継ぐ」ということに使われている。また、それに続いて「ヒヤリハット」「安全点検」「地震の時の対策」などの記述もみられた。「健康状態」「アレルギー」「感染症」「嘔

吐」と「子どもの体調」に関する記載をしているという記述も多い。他に子どもに関しては、「トラブルや様子」などについての記述も安全管理として書いている園もみられる。「外からの来園者」や「いつもと違う人がお迎えに来る場合」などについて記載し、「不審者対策」をしている記述もあった。

＜記録の活用＞としては、「安全の確認」や「環境の安全対策」などに活かすという園がみられた。具体的な例としては、「けがや事故など、どうしてどうなったのか、どう対応したのか」「食物アレルギーや健康状態などの引き継ぎ」「その日の子どもの健康状態や保護者からの連絡を連携し合う」「遊具の使い方、子ども同士のトラブル（けんか）などの連絡」「ヒヤリハットの記入」「園内環境の不具合や危険箇所を伝達・確認し、けがや事故を防ぐ」「降園時刻やお迎えの人の記録」「担当者だけでなく、管理職が目を通すことで安全管理に落ち度がないか確認」「清掃点検、安全点検」「不審者情報や遊具使用時の問題点」などが記載されていた。

＜記録を利用していない＞という場合は、口頭で引き継ぎをしているという園が多くみられた。具体的には「引き継ぎは、預かり保育開始前と終了時に口頭で伝達している」「別の引き継ぎ簿を使用している」などの記述がみられた。

(6)-4　別担当者（学級担任等）への幼児の個別の引き継ぎとして利用【設問 3-(4)-4】



図(6)-4　別担当者（学級担任等）への幼児の個別の引き継ぎとして利用

別担当者への幼児の個別の引き継ぎとして利用している園が 56%（152 園）であった。(図(6)-4)

預かり保育の園児数割合や保育日数割合が高い園に個別の引き継ぎとして利用している園が多い傾向がある。理由としては、人数が多いことによる伝達漏れがないように対策しているものと思われる。

内容としては、けがや事故、アレルギーや体調、園児同士の関係性、保護者からの連絡などを引き継いでいる。また、別担当者への幼児の個別の引き継ぎとして記録を利用していないという園でも、職員会議や担当者同士で直接、口頭やメモで引き継いでいる。

＜記録内容＞として別担当者への幼児の個別の引き継ぎとして利用している具体的な例は、「怪我・体調・トラブル」「子どもの様子」「個別の対応」「支援の必要な子どもについて」など、特に注意をしておくべき、意識してみるべき子どものことを教育時間の担任に知らせるために活用しているというものが主であった。「お迎えの時間」「保護者からの伝達」など家庭との連携に関する事項について記載している園もみられた。

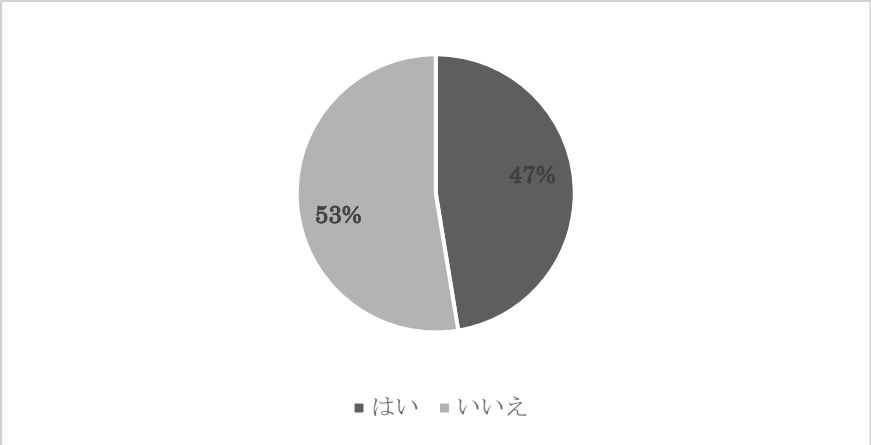
＜記録の活用＞においては、「子どもの様子の把握」のために利用しているという記載がみられる。特に、「翌日の保育にすぐ活かす」というだけでなく、「記録として残しておくことでその後の確認をする際に使う」という記述があった。

具体的な例としては、「けがや体調などを伝達する」「お迎えの時刻やそのときの様子な

どを記載する」「保護者からの連絡や相談などを連携し合う」「一人一人を大切にするため」「園児間のトラブルやけがあった場合」「同年齢やクラスの集団では見られないような、異年齢のかかわりや遊ぶ様子、気づいた点を伝えられるようにしている」「毎朝、各クラスへ回覧して目を通すようにしている」「記録のファイルを、いつでも誰でも見られるようにしている」「預かり保育担当者からクラス担任という一方通行ではなく、双方向のコミュニケーションを重視している」などの記述がみられた。

＜記録を利用していない＞では、「口頭で引き継ぎをしている」という園が多くみられる。具体的には、「引き継ぎは必ず口頭で伝えるようにしている」「口頭で十分意思疎通できる規模で運営している」「日誌はすべての担任が目を通す時間的余裕がないので、口頭で伝達している」「職員会議などを通して、普段から連絡を密にしている」などの記述があった。

(6)-5　別担当者（学級担任等）への幼稚園全体の状況などの引き継ぎとして利用【設問3-(4)-5】



図(6)-5　別担当者（学級担任等）への幼稚園全体の状況などの引き継ぎとして利用

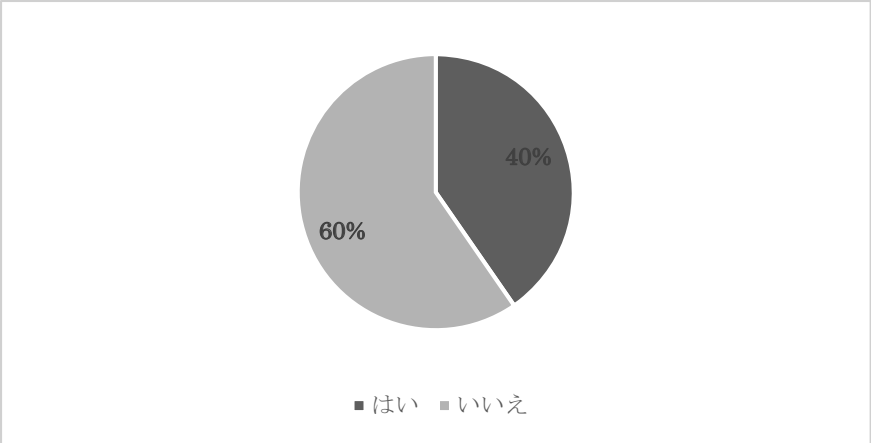
別担当者への幼稚園全体の状況などの引き継ぎとして利用している園が 47%（128 園）であった。(図(6)-5)

預かり保育の園児数割合が高い園に別担当者への引き継ぎとしての利用が多い傾向がある。そのとき、全職員に伝わるように記録ファイルを配置したり、職員会議などで伝達したりするようにしている。別担当者への幼稚園全体の状況などの引き継ぎとして利用していないという園では、口頭での伝達を重視している。

＜記録を利用している＞という園では、「子ども同士の人間関係など」「常に情報交流の一つとして活用」「全職員の朝礼で報告を行う」「園環境の不具合や違和感を翌朝のミーティングで共有」「日誌も活用しながら、報告会での報告や連絡相談をしている」「日誌だけではなく、常に話し合えるようにも配慮している」「預かり保育委員会があり、定期的に問題点や課題について話し合っている」「長期休業中のみ日誌を活用している」などの記述がみられた。

＜記録を利用していない＞という園では、「基本的には口頭で伝えている」「職員会議などを通して、普段から連絡を密にしている」などの記述があり、直接の伝達を重視していることが伺える。また「全体の引き継ぎや共通理解のために、別に文書を作成している」などの記述もあった。

(6)-6　預かり保育の内容や幼児の様子を保護者に伝えるために利用【設問 3-(4)-6】



図(6)-6　預かり保育の内容や幼児の様子を保護者に伝えるために利用

預かり保育の内容や幼児の様子を保護者に伝えるために利用している園が 40%(109 園)であった。(図(6)-6)

預かり保育の園児数割合が高い園の方が保護者へ伝えるために利用している割合が高い傾向がある。

記録を保護者に伝えるために利用していないという園は、「日誌を保護者に直接見せているか」という設問だと受け取ったように感じられる。

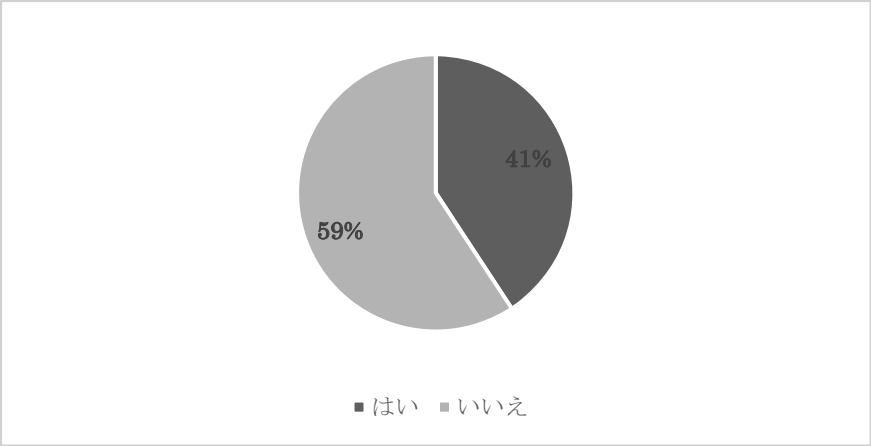
＜利用している＞場合には、「子どもの様子の伝達」や「健康状態の伝達」に利用している園が多くみられた。「お迎えに来た際に、教育時間の担任が書いた記録や、預かりで気になった事項などを確認して伝える際に利用している」という記述もみられた。また、預かりの子どもたちの園での様子を伝えるための「お便り」や「ドキュメントシート」「メール」などの作成のためや「教育時間の担任が子どもの様子を伝える」ために、預かりの記録を活用しているという記述があった。その他に、記録は活用していないものの、その日のことは口頭で保護者に伝えているという園や、お便りや写真で保護者に預かり保育での子どもの様子を伝えているという園がみられた。

具体的には、39 園から自由記述があり、「ホームクラスだよりを毎月発行している」「記録をとることで正しい情報や振り返りの確認になる」「月々の生活状態を報告するために利用している」「日ごとの遊びの様子を記録し、預かり保育だより作成に反映させている」「記録を元に、適宜保護者に一斉メールで様子を伝えている」「ドキュメントシートを作り、保護者が自由に見られるようにしている」「クラス担任から伝えた方が良い内容について把握するために利用している」「長期休業中のみ日誌を活用している」などの回答がみられた。

＜利用していない＞という園は、利用していない理由として、口頭または、お便りや活動予定の配布、掲示、写真などで保護者に子どもの様子を伝えていた。

具体的には、「記録は園内部のみに使用している」「口頭で連絡している」「写真を掲示して伝えている」「毎月、活動予定を配布している」「預かり保育だよりを発行している」「園だよりに預かり保育のことも記載している」などの記述があった。

(6)-7　幼児の個別の特記事項を保護者へ伝達するために利用【設問 3-(4)-7】



図(6)-7　幼児の個別の特記事項を保護者へ伝達するために利用

幼児の個別の特記事項を保護者へ伝達するために利用している園が 41%（110 園）であった。

利用している園もしていない園も、基本的に特記事項に関することは電話や直接など口頭で伝えている園が多い。ただし、保護者に伝えたことを記録に残しておく、教育時間の担任から預かりの担任に引き継いでおくべき事項は忘れないように、また今後の確認のために記録に残しておくという園があった。

＜利用している＞という園の記述内容は、「けがや担任からの伝言等」「クラス担任から伝えた方が良い内容について把握するために利用している」「記録することで、間違いをなくす」「事故、けが、トラブルなどの経過の記録」「教育課程時間内の様子や変わったことや気になることを伝達して、預かり保育担当者から保護者へ伝えてもらう」「保護者へ伝達したことを記録に残す」「預かり保育専用の伝達カードを作っている」などであった。

＜利用していない＞という園の記述内容は、「口頭で直接伝えるようにしている」「記録は園内部のみに使用している」「送迎のときに口頭で連絡している」「電話か口頭で伝えている」などであった。

(6)-8　その他【設問 3-(4)-8】

その他として自由記述で尋ねたところ、36 園から次のような回答があった。

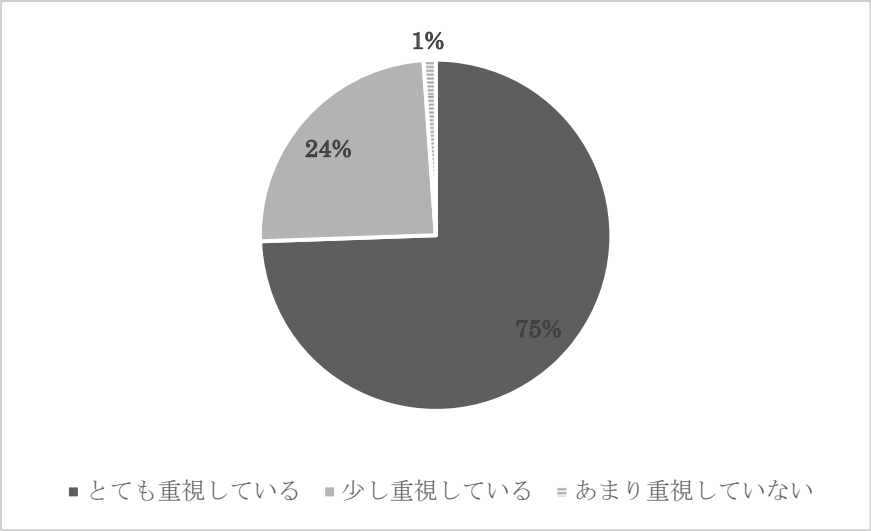
「2 号ではある程度記録しているが、1 号預かり保育は日替わりメンバーのため対応できていない」「子どもの活動を記録し、園長への報告として活用」「クラス担任や保護者へは直接伝えるようにしている」「記録としては利用者数くらいしか残していないが、気になったことは、その都度連絡を取り合っている」「当日の預かり保育名簿（学年、クラス、氏名、預かり時間、料金）」「教育としての質の向上を、預かり保育においても考えていかなければならないと思っている」「日誌の作成はしていない」「担当者同士が顔を合わせて伝達する」「これからは日誌を作成していきたいと思う」「預かり保育での様子をクラス担任が聞き、クラス活動でも生かしている」「園全体で個別の対応ができるように連携を密にしている」「管理職が細かな情報把握としても利用している」「年に数回、保護者向けにおたよりを出している」「ノートへ箇条書きし、常に書き込める状態にしている」。

預かり保育の記録は、預かり保育の園児数が多い方が活用している傾向があるが、いずれの園においても、園内で担任や園全体との間では記録（日誌）だけではなく様々な方法によって随時、連携や伝達がスムーズに行われている。また保護者との間においても、口頭やメモで日常的に密な連絡が取られている。

（７）配慮事項

預かり保育を実施する上で、どの様な実践上の配慮をしているのか尋ねた。質問項目は、「園児がゆったり落ちついて過ごせるための配慮」「園児が自らしたい遊びを選択して過ごせるための配慮」「その日の生活の流れ（静・動）への配慮」「幼児の年齢や体調を考えて翌日も元気に過ごすための配慮」「その他の配慮していることについて」である。

(7)-1　園児がゆったり落ちついて過ごすための配慮【設問 3-(5)-1】



図(7)-1　園児がゆったり落ちついて過ごせるように配慮している

「園児がゆったり落ちついて過ごせるように配慮している」か,どうかについて尋ねた質問では、重視していると回答した園は 99%（267 園）であった。(図(7)-1)

園児がゆったり落ちついて過ごせるように配慮している園にその理由を自由記述で尋ねたところ、146 園から回答があった。内容を分析したところ、＜保育環境の工夫＞＜保育内容の工夫＞＜生活の流れの工夫＞＜保育者の配置・かかわりの工夫＞＜雰囲気への配慮＞が主な理由として挙げられていた。

＜保育環境の工夫＞と挙げた園は、理由を回答した園のうち 30.9%（47 園）であった。内容としては、ソファや畳など、子どもが横になるなどくつろげる環境を作っている園が最も多かった。また、遊びの充実のために、遊びのコーナーの設置やスペースの確保、預かり専用の玩具を用意するなどの工夫をしている園がみられる。具体的な例として、「遊び込める空間の設定」「子どもたちが過ごしやすいスペースの確保」「教室とは違う環境づくりの工夫」「年齢別の玩具の用意」というような回答が記述されている。

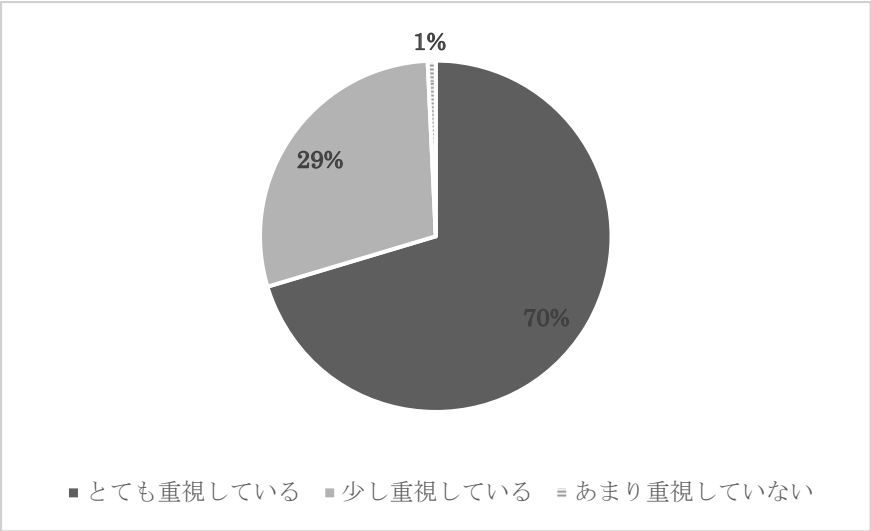
＜保育内容の工夫＞と挙げた園は 25.0%（38 園）であった。内容としては、自ら遊びを選ぶことができるようにしている園が最も多く、落ち着いて遊ぶことができたり教育時間とのバランスを考えた活動をしたりしている園も見られた。具体的な例として、「一人ひとりのペースに合わせた自由活動」「思い思いの遊びが楽しめる工夫」「日中の活動内容に考慮した静と動の活動の選択する」というような記述が回答されている。その他に、低年齢児や疲れた子に対する午睡の配慮などの回答が記述されていた。

＜生活の流れの工夫＞とあげた園は、7.9%（12 園）であった。内容としては、時間に追われることなく、ゆったりとした流れをつくるように配慮している園がみられた。具体的な例として、「時間に追われない配慮」「子どものペースで過ごせるような時間の確保」というような回答が記述されていた。

また、個別に丁寧に関わることを意識し、気持ちが安定した穏やかで優しい人を専任保育者に選ぶなど、関わりの工夫や家庭的な雰囲気づくりへの配慮が記述されていた。また、

「教育時間との明確な区切りをつけるために着替える」「おやつを選べるようにする」「細かな規則を設けないようにする」など、多様かつ細やかな配慮も記述されていた。

(7)-2　園児が自らしたい遊びを選択して過ごすための配慮【設問 3-(5)-2】



図(7)-2 園児が自らしたい遊びを選択して過ごせるように配慮している

「園児が自らしたい遊びを選択して過ごせるように配慮しているどうか」について尋ねた質問では、とても重視していると回答した園は 99%（168 園）であった。(図(7)-2)

園児が自らしたい遊びを選択して過ごせるように配慮している園にその理由を自由記述で尋ねたところ、123 園から回答があった。内容を分析したところ、＜環境構成＞＜保育の内容＞が主な理由として挙げられていた。

＜環境構成＞と挙げた園は、理由を回答した園のうち 65.6%（86 園）であった。内容としては、環境構成への配慮がしたい遊びの選択の配慮で最も多かった。特にコーナーを設置し、子どもがしたいこと・興味がもてるようなものを設定したり、様々な玩具を種類・量ともに用意したりして子どもが選べるようにしている園が多くみられる。コーナーの設定に関しては、子どもが選べるようにしながらも、選べるコーナーをどのように設定するのかということを考えているという記述があった。具体的な例としては「季節に応じた制作」「日替わりによるコーナーの中身の変更」「環境評価スケールに基づいて構成する」というような回答が記述されている。

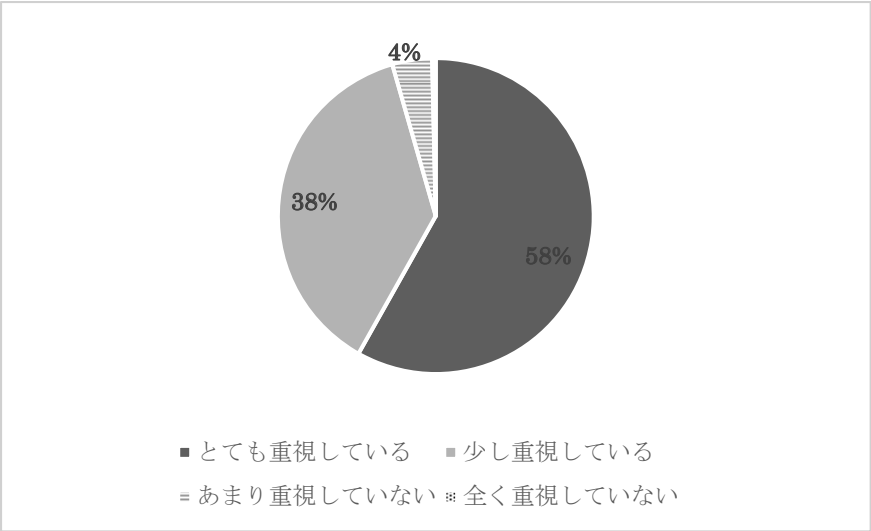
また、預かり専用の遊具を用意して違う遊びを楽しめるようにしたり、前日の遊びの続きができたり、他のクラスから玩具を持ってくることができたりという遊びの広がりに関する記述などもみられる。

その他に、発達に即した環境や、時期・季節・天候等に合わせた環境の構成など、園児の実態を踏まえて、柔軟に対応している園もある。

＜保育の内容＞とあげた園は、理由を回答した園のうち 27.5%（36 園）であった。内容としては、子ども達がしたい遊びや遊びたい場所を選べるようにしているという記述が最も多かった。具体的な例としては、「子どものやりたい遊びの尊重と遊びの発展への工夫」「自らの遊びができるための配慮」「外遊び、室内遊びなど、天気や時間による配慮」というような回答が記述されている。他に、教育時間の活動との連続性を考慮している園もみられた。具体的な例としては、「教育活動の内容を担任から受け継いで、午後の預かり保育と一連の活動になるような配慮」「教育時間中の一斉活動を考慮して園児が自らの思いで自由にできるようにする」というような回答が記述されていた。また、「園児を良く観察し、活動を展開していくために、活動場所別、活動内容別に分かれて指導したり、一緒に遊ん

だりする」などの記述も見られた。その他に、好きな遊びを選択させたいが、空間的な問題や環境構成に課題を抱えているという記述もみられた。

(7)-3　その日の生活の流れ（静・動）への配慮【設問 3-(5)-3】



図(7)-3 その日の生活の流れ（静・動）に配慮している

「その日の生活の流れ（静・動）に配慮しているかどうか」について尋ねた質問では、とても重視していると回答した園は 96%（258 園）であった。(図(7)-3)

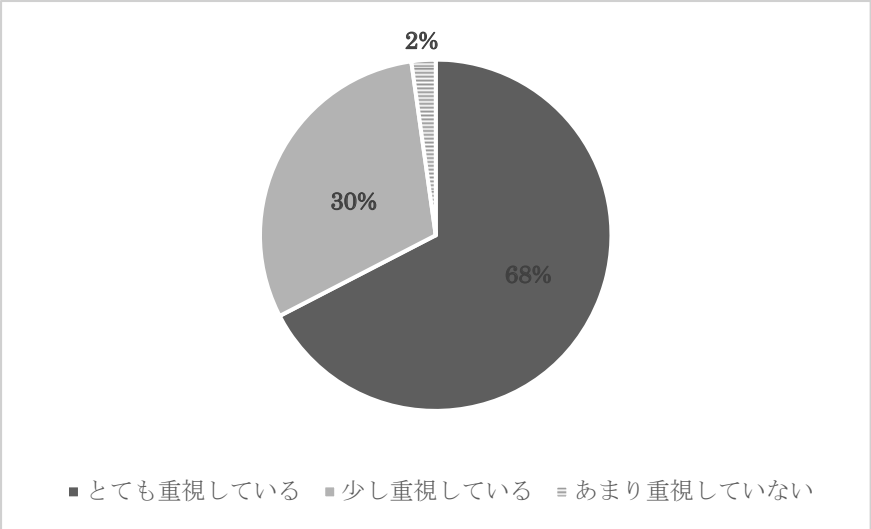
その日の生活の流れ（静・動）に配慮している園にその理由を自由記述で尋ねたところ、111 園から回答があった。内容を分析したところ、＜保育の内容＞＜環境構成＞が主な理由として挙げられていた。

＜保育の内容＞と挙げた園は、理由を回答した園の 9 割を占めている。内容としては、1 日の流れの中で教育時間の活動を考慮して静と動のバランスを取るという記述と、預かり保育の時間内において外遊びなど活発に活動する時間と室内でゆっくり遊ぶ時間とを設けるという記述が多かった。１日の流れを考慮した具体的な例として、「身体をたくさん動かした日は室内遊び、制作が多かった日は外遊びに誘う」「教育課程に関わる時間で動の活動が多かった日は、静かに落ち着く時間を増やす」「午前中の保育の内容を把握して預かり保育の計画を立てる」「運動会の練習のある日などは積極的に休息を入れる」というような回答が記述されていた。

また、預かり保育の時間内に於いての具体例としては、「前半は体力に合わせて外遊びやホールでの動的なあそび、後半の時間は体力と集中力を考慮し、室内で静的な時間にする」「子どもが活発に身体を動かして遊ぶ時間（動）や、座って落ち着いて遊ぶ時間（静）を毎日取り入れる」というような回答が記述されていた。その他に、家庭に戻ってからの子どもの過ごし方についてなどを踏まえてという、預かり保育のあり方が、その子の生活のリズムを整えていくことにもつながることを配慮した記述がみられた。

＜環境構成＞と挙げた園は、ゆっくりできる環境・じっくりできる環境など、子どもが落ち着いて遊びに取り組める環境についての記述がみられた。具体的な例として、「活発な活動ができるコーナー、ゆっくりするコーナーの設定をする」というような回答が記述されていた。また、課題として、配慮の重要性は意識しながらも、個別への配慮への難しさや、空間的な限界などを挙げている記述もみられた。

(7)-4　幼児の年齢や体調を考えて翌日も元気に過ごすための配慮【設問 3-(5)-4】



図(7)-4　幼児の年齢や体調を考えて翌日も元気に過ごすために配慮している

「幼児の年齢や体調を考えて翌日も元気に過ごせるように配慮しているかどうか」について尋ねた質問では、重視していると回答した園は 98%（164 園）であった。(図(7)-4)

幼児の年齢や体調を考えて翌日も元気に過ごせるように配慮している園にその理由を自由記述で尋ねたところ、133 園から回答があった。内容を分析したところ、＜保育内容への配慮＞＜保育を実施する上での配慮＞＜担任・担当間の連携・情報共有＞＜保護者との連携＞が主な理由として挙げられていた。

＜保育内容への配慮＞と回答した園は、理由を回答した園の約 62.4%（83 園）にみられた。活動を考える上で、教育時間の活動を踏まえて活動を考える（一日の静と動のバランスへの配慮)、預かり保育内の静と動のバランスへの配慮、預かり時間内に休息時間を設けるなど、1 日の生活のトータルを考えて活動に緩急をつけるという配慮を実施しているという記述がみられた。具体的には、「教育課程時間の内容も確認しながら預かり保育を進めている」「教育時間が外であれば預かり時間はゆっくり過ごすなど、疲れが残らないように配慮する」「預かり保育時間内の後半は、室内でゆったりと過ごす」「預かり時間内に時間を決めて休息をとる」というような回答が記述されている。教育時間の活動とのバランスを考え、子どもに無理をさせず心身ともにゆったり過ごせるようにしていることが伺える。

また、個々の子どもの体調・体力を踏まえた活動を考える、季節や天候を踏まえた活動を考える、個々の子どもの様子を踏まえた休息等の実施、子どもの年齢に応じた休息の実施、など、子どもの体調・体力に配慮をしている記述が 46.6%（64 園）でみられた。具体的な例としては、「天候や気温などに応じて休憩時間の調節」「季節に応じての温度の管理」「暑い日の戸外に出る時間の管理」というような回答が記述されていた。

＜保育を実施する上での配慮＞と挙げた園は、理由を回答した園の 17.6%（23 園）にみられた。内容として、子どもの様子の観察や視診の実施を行なっているという記述がみられた。預かり保育の間に子どもの様子を観察するというだけでなく、預かり保育の開始時の視診について記述している園もみられた。具体的な例としては、「顔色の変化に目を配る」「受け入れ時、引き渡し時の個々の体調確認、視診の実施」「子ども達の様子を視診し、声をかけ、早めの保護者への連絡」というような回答が記述されている。

その他に、「子どもの健康状態に関して担任や担当間で子どもの様子について情報共有する」「体調不良の際に保護者に連絡する、早めに迎えにきてもらう」などの、担任・担当間の連携・情報共有、保護者との連携の配慮に対する回答が記述されている。

(7)-5　その他の配慮　【設問 3-(5)-5】

その他　特に配慮していることを自由記述で挙げられた内容を分析したところ、＜保護者との連携＞＜個別の対応＞＜安全面や体調の管理＞<担任・担当間の連携＞が主な内容として挙げられていた。

＜保護者との連携＞と挙げた園は、具体的な例として、「その迎えに来た保護者に対して、遊びの姿だけでなく育ちの姿を伝える」「保護者からの相談に応じる」というような回答が記述されていた。園児との関わり方について理解を深めながら、園と家庭との連携を深め合いながら家庭の教育力向上につなげていると考えられる。

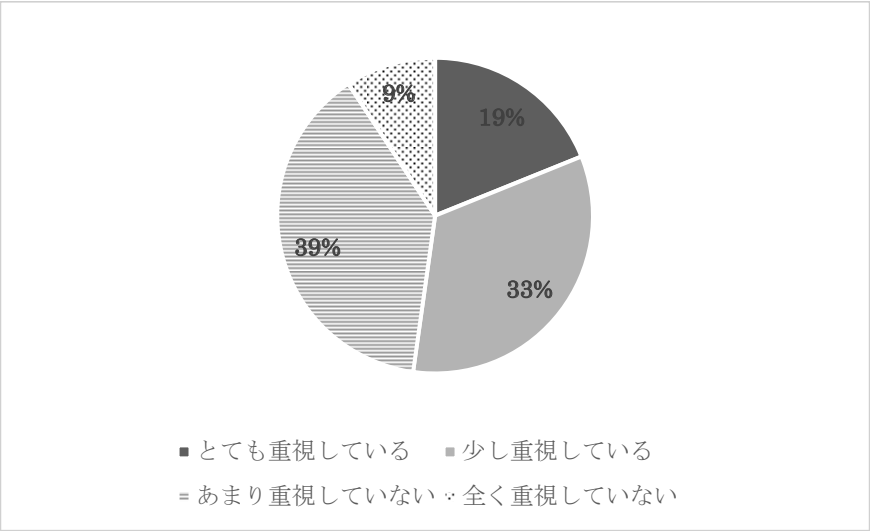
＜個別の対応＞と挙げた園の具体的な例としては、「気になる、または支援の必要な子どもには個別の対応をする」「園児が寂しさを感じたりしないように、特に最後まで残っている園児への心の配慮をする」「異年齢の子どもや、担任以外の教職員と関われない子どもの配慮をする」「子どもたちが楽しい、また預かり保育に行きたいと感じられるように、保育内容を検討し、細かな対応が出来るようにしている」というような一人一人の子どもに対する丁寧な回答が記述されている。

＜安全面の配慮＞と回答した園の具体的な例としては、「怪我のないように注意する」「感染症が流行している時期は特に体の様子を確認する」「感染症による欠席者が出た場合は掲示板で知らせる」「検温をして引継ぎ健康チェックをする」「緊急・災害時に備えて、パネルを使用し常に人数確認が出来るような安全管理における体制を整えている」というような安心・安全に関わる回答が記述されている。その他に、人数の多い時は補助教職員を増やしたり、教職員間の話し合いを重ねたりするなど、子どもたちにとって最善の預かり保育が出来るようにしている園もみられる。

（８）家庭との連携

預かり保育を実施する上で、保育や育児環境を含めて、どの様に家庭との連携をしているかについて尋ねた。質問事項は「園内掲示」「紙面でのお知らせ（おたより等）」「ｗｅｂやアプリケーション（お知らせ等）」「登降園時の保護者との会話」「預かり保育に保護者が参加する機会や場の提供（参観、親子で遊ぶ場、子育て広場、子育て相談など）」「家庭での学びの支援（絵本や歌詞、楽譜、レシピなど、家庭でできる活動を支援する資料の貸し出しなど）」「その他の取り組みまたはとても重視している取り組み」である。

(8)-1　園内掲示【設問 3-(6)-1】

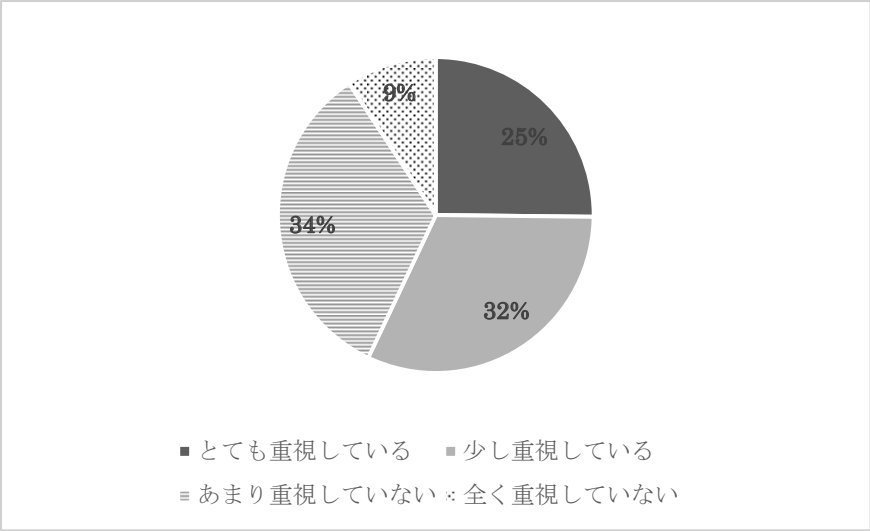


図(8)-1　園内掲示による家庭との連携

「園内掲示により家庭との連携をしているか」について尋ねた質問では、重視していると答えた園は 52%(141 園)であった。（図(8)-1)

「園内掲示」を重視していると回答した園が具体的に挙げている例としては、「定期的に活動内容をポスター形式にして掲示している」「その日の活動の様子を知らせる為に園の出入り口に掲示している」「預かり保育の日々の活動内容を作成して、保護者や子どもたちに知らせ、目的意識を持って過ごせるようにしている」などが見られ、預かり保育の時間についても子どもがどのように園で過ごしているのかについて、子ども・保護者が一緒に見られる、知ることができるよう工夫していることがわかる。

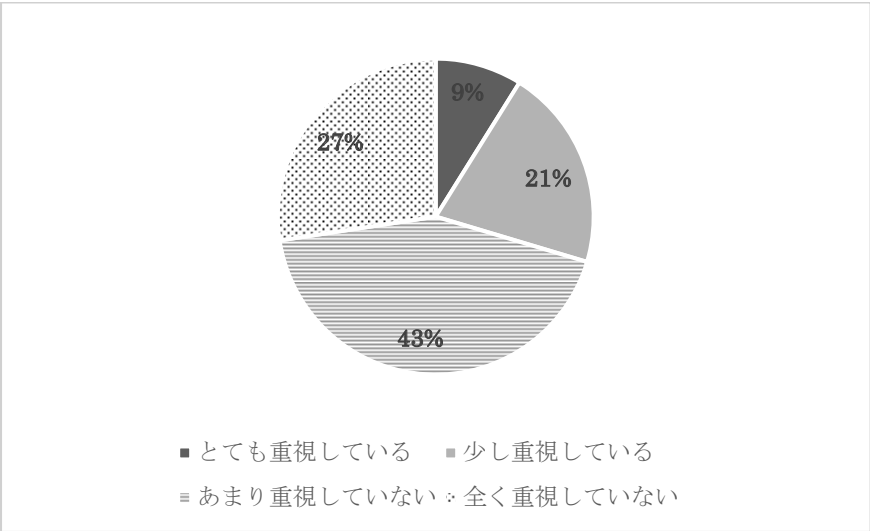
(8)-2　紙面でのお知らせ（おたより等）【設問 3-(6)-2】



図(8)-2　紙面でのお知らせ（おたより等）による家庭との連携

「紙面でのお知らせにより家庭との連携をしているか」について尋ねた質問では、重視していると答えた園は 57%(154 園)であった（図(8)-2)。子どもの様子を紙面という形により家庭でゆっくり読むことができるようにしている園が多いことが伺える。「紙面でのお知らせ」を重視していると回答した園は具体的な例として「学期に１回程度、または月に１回、預かり保育だよりを配布している」「おたよりで一人ひとりの子どもの様子や、遊びの姿を知らせている」などと回答している。

(8)-3　ｗｅｂやアプリケーション（お知らせ等）【設問 3-(6)-3】

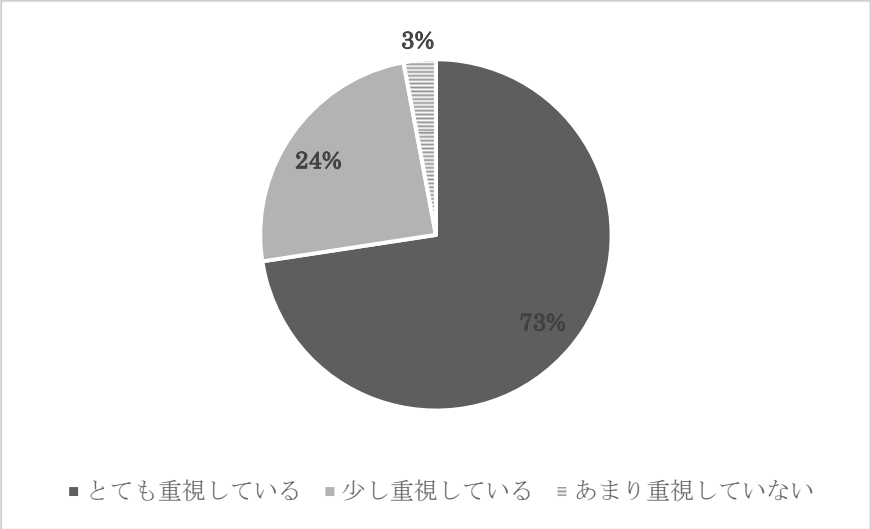


図(8)-3　ｗｅｂやアプリケーション（お知らせ等）による家庭との連携

「ｗｅｂやアプリケーションにより家庭との連携をしているか」について尋ねた質問では、重視していると答えた園は 30%(80 園)であった。(図(8)-3)
「ｗｅｂやアプリケーション」をとても重視していると回答した園は具体的な例を自由記述の中で、「ＨＰとＦＢにほぼ毎日子どもの園での生活をアップしている」「園のホームページに掲載している」というような回答が記述されている。

預かり保育の時間に、どのような活動が行われ、子どもがどう育っているのかなど、「園内掲示・紙面でのお知らせ・ｗｅｂやアプリケーション」により可視化して子どもの育ちを丁寧に伝えることが、子どもの理解、そして保護者との関係づくりのツールになっているように伺える。

(8)-4　登降園時の保護者との会話　【設問 3-(6)-4】

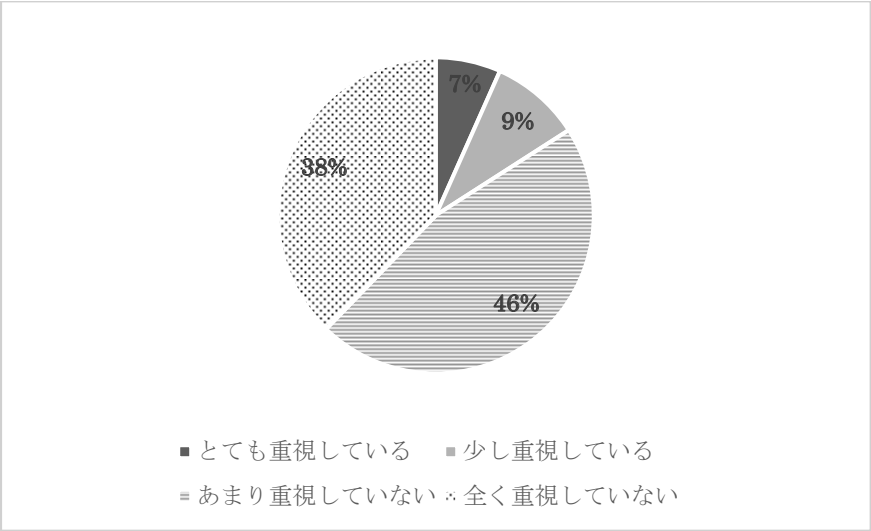


図(8)-4　登降園時の保護者との会話による家庭との連携

「登降園時の保護者との会話により家庭との連携をしているか」について尋ねた質問では、重視していると答えた園は 97%(262 園)であった。(図(8)-4)

「登降園時の保護者との会話」を重視していると回答した園は具体的な例を自由記述の中で、「直接話をすることが、信頼関係の構築にもつながるため、なるべく日々様子を伝えながら連携を図るようにしている」「園の様子ばかりでなく、家庭での様子を聞き翌日の保育につながるように努めている」というような回答が記述されている。登降園時を情報交換の機会として、保育者自身が自分の言葉で子どもの遊びの姿や変化を観察して保護者に伝える。また、保護者の気持ちも受け止めるなど、保護者との会話を通してコミュニケーションをとることを大切にしていると考えられる。

(8)-5　預かり保育に保護者が参加する機会や場の提供（参観、親子で遊ぶ場、子育て広場、子育て相談など）【設問 3-(6)-5】

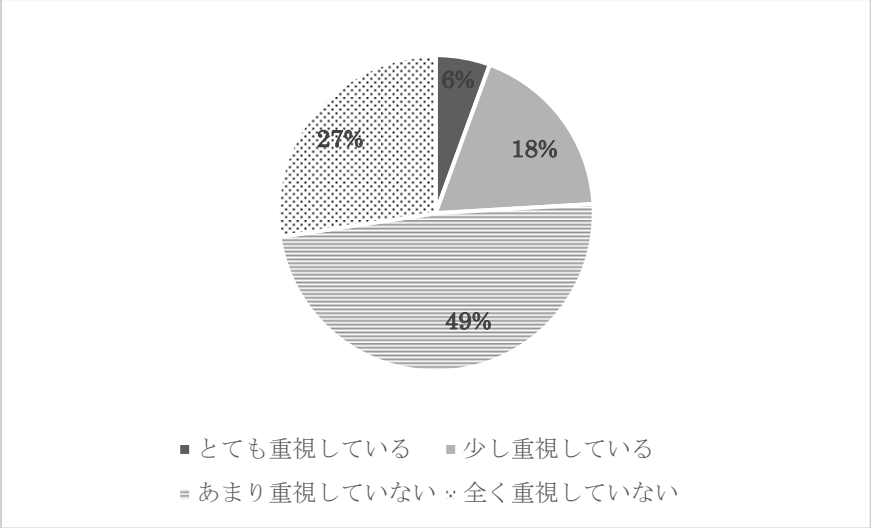


図(8)-5　預かり保育に保護者が参加する機会や場の提供による家庭との連携

「預かり保育に保護者が参加する機会や場の提供により家庭との連携をしているか」について尋ねた質問では、重視していると答えた園は 16%(43 園)であった。(図(8)-5)

「預かり保育に保護者が参加する機会や場の提供」を重視していると回答した園は具体的な例を自由記述の中で、「長期休業中の預かり保育の時に、保護者にボランティアとして保育に協力してもらっている」「預かり保育が終わってから、帰りのチャイムが鳴るまでは、園庭で遊んでも良いことにし、親同士、子ども同士で交流が深まるようにしている」というような回答が記述されている。保護者の預かり保育におけるボランティアや、預かり保育後の時間を利用した親同士の交流など、実体験を通して保育や育児環境の理解につなげていることが伺える。

(8)-6　家庭での学びの支援（絵本や歌詞、楽譜、レシピなど家庭でできる活動を支援する資料の貸し出しなど）【設問 3-(6)-6】



図(8)-6 家庭での学びの支援による家庭との連携

「家庭での学びの支援」を重視していると回答した園は、24%（65 園）であった。具体的な例を自由記述の中で、「絵本の貸し出しについて預かり保育の園児のみならず、全ての園児に実施している」という回答が記述されている。預かり保育の園児に捉われずに、全ての園児の絵本の貸し出しなど家庭に帰ってからの過ごし方につながるための工夫など努力している様子が伺われる。

(8)-7　その他の取り組み　【設問 3-(6)-7】

その他の取り組み または、とても重視している取り組みについて自由記述で尋ねた質問では、園から回答があった。取り組みの内容を分析したところ、＜コミュニケーションをとる＞＜子どもの様子を知らせる＞＜育児の相談・アドバイス＞＜預かり保育における配慮＞が主に挙げられていた。

＜コミュニケーションをとる＞と回答した園は 41.8%(18 園)であった。内容としては、園での子どもの様子を伝える、家庭での様子をきく、保護者と直接会話をするなど、保護者と子どもについてのコミュニケーションを直接とるという記述が最も多くみられた。具体的な例としては「その日の遊びや、成長した様子などを具体的に保護者に伝える」「教育的な指導を念頭に置き家庭と連携しながら子どもを見守る」「家庭の様子を聞き、翌日の保育につなげる」というような回答が記述されている。預かり保育の様子や家庭での様子を直接保護者と情報交換し合いながら、保護者との信頼関係の構築や園児への理解を深め合うことにつなげていると考えられる。

＜子どもの様子を知らせる＞と回答した園は 14%(6 園)であった。内容としては、預かり保育の子どもたち全体の様子を、お便りや掲示物、Web・SNS などで保護者に伝えるという記述がみられた。具体的な例としては「預かり保育の日々の活動内容を作成して保護者に知らせ、目的意識を持って過ごせるようにする」「おたよりで一人ひとりの子どもの様子や、遊びを知らせる」という回答が記述されている。預かり保育の活動内容をポスター形式にして掲示したり、預かり保育だよりを配布したりすることにより、教育課程の時間が終わった後も、園児の豊かな育ちを保障する生活が行われていることを理解してもらうことにつなげていると考えられる。

＜育児の相談・アドバイス＞と回答した園は 11.5%(5 園)であった。保護者の育児の相談にのっているという記述については、預かり保育専用の育児相談というよりは、必要に応じて実施しているようである。

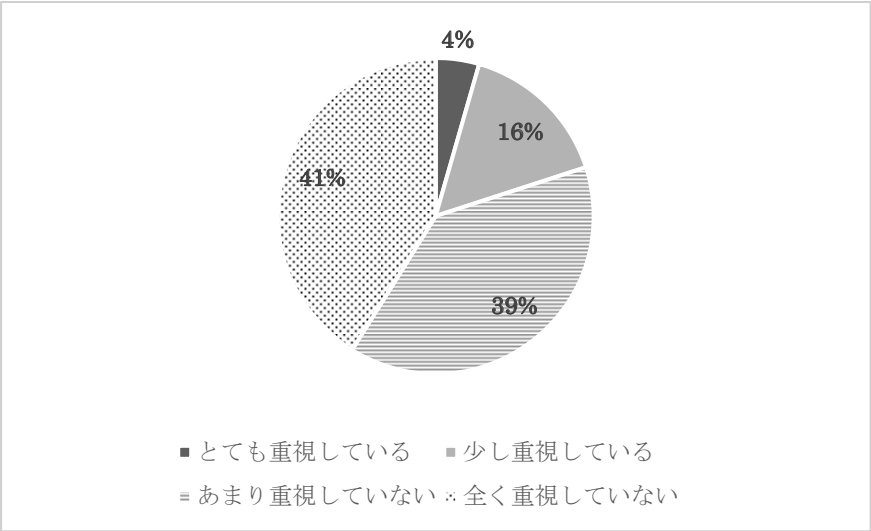
＜預かり保育における配慮＞と回答した園は 7%(3 園)であった。保護者が安心して預けることができるよう保育することについて記述している園があった。

その他に、預かり保育後の園庭開放、絵本の貸し出しなど、預かり保育と家庭・保護者をつなげる上で園の物的環境を利用しているという記述がみられた。また、保護者が保育に参加するという記述もあった。

（９）地域との連携

預かり保育において、地域の人や施設との出会いや関わり等についてたずねた。質問項目は、(9)-1 小学校・中学校など地域の異年齢の幼児・児童などとの交流、(9)-2 高齢者を含む地域の人々との交流、(9)-3 地域の行事への参加、(9)-4 地域の人とのつながりの活用、(9)-5 地域の場の活用についてである。

(9)-1　異年齢の幼児・児童などとの交流【設問 3-(7)-1】

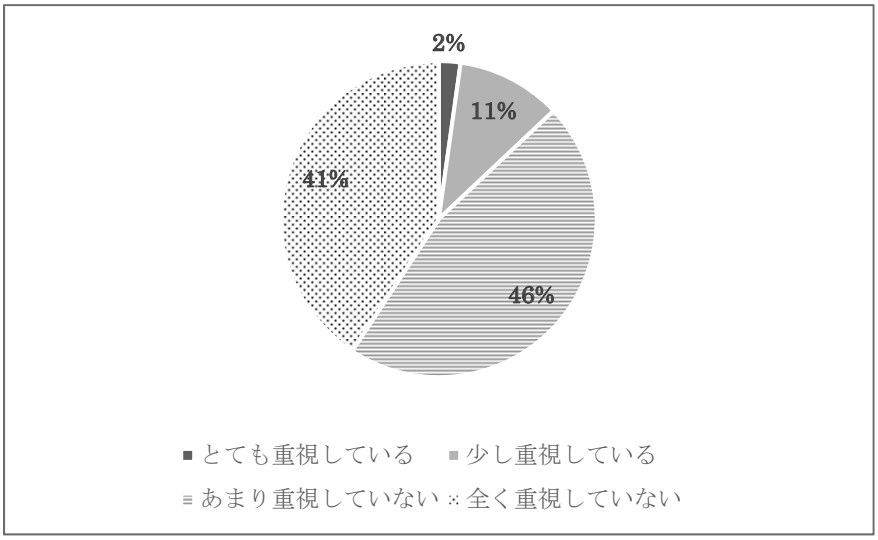


図(9)-1　異年齢の幼児・児童などとの交流

「異年齢の幼児・児童などと交流しているか」について尋ねた質問では、重視している（とても重視している・重視している）と答えた園は 20%(54 園)であった。

自由記述の回答を見ると、「自由遊び中心に大家族、大きな兄弟の関係性を大事に過ごしている。」等の記述があり、幼稚園降園後は地域で過ごすという観点から、地域では様々な人に出会うということを意識していると考えられる。

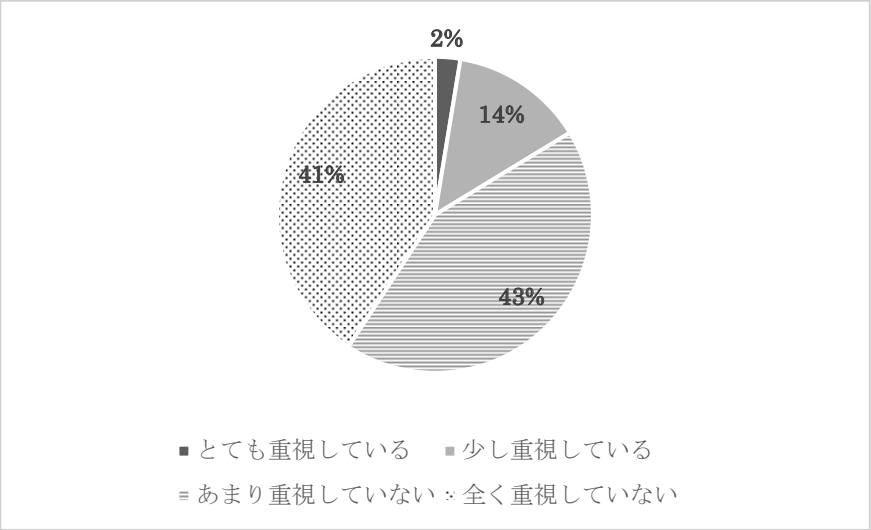
(9)-2　高齢者を含む地域の人々との交流【設問 3-(7)-2】



図(9)-2　高齢者を含む地域の人々との交流

「高齢者を含む地域の人々との交流をしているか」について尋ねた質問では、重視している（とても重視している・重視している）と答えた園は 13%(35 園)であった。

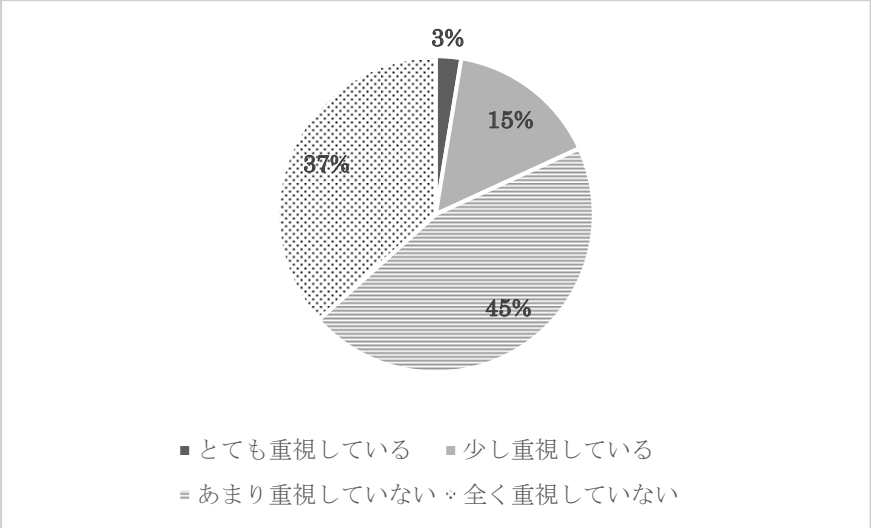
(9)-3　地域の行事への参加【設問 3-(7)-3】



図(9)-3　地域の行事への参加

「地域の行事に参加をしているか」について尋ねた質問では、重視している（とても重視している・重視している）と答えた園は 16%(44 園)であった。

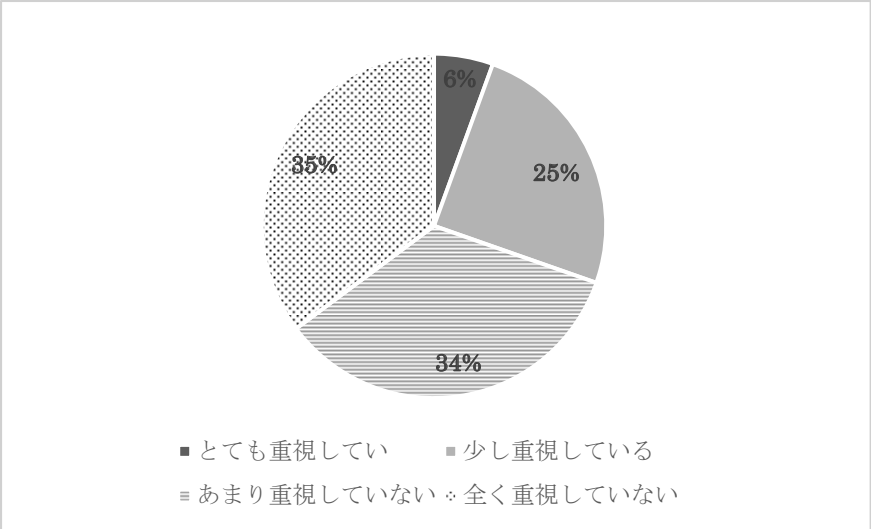
(9)-4　地域の人とのつながりの活用【設問3-(7)-4】



図(9)-4　地域の人とのつながりの活用

「地域の人とのつながりの活用をしているか」について尋ねた質問では、重視している（とても重視している・重視している）と答えた園は 18%(49 園)であった。

(9)-5　地域の場の活用【設問3-(7)-5】



図(9)-5　地域の場の活用

「地域の場の活用をしているか」について尋ねた質問では、重視している（とても重視している・重視している）と答えた園は31％(83園)であった。

自由記述をみると地域の行事に参加する、園外保育の実施、地域の場の活用（児童館・図書館・公園)、老人ホームへの慰問など、＜地域に出かける＞という記述がみられた。ただし、通常時というよりも長期休暇の預かり保育の中で実施している園が多いようである。クッキング、自然に触れる、体験活動の実施、習い事など、幼稚園降園後に地域で過ごす際の経験を幼稚園で行えるようにしている等、＜家庭や地域での経験的な保育内容＞の記述も見られる。中高生のボランティアや職業体験についての記述や、お茶会や読み聞かせなどが外部の人に園内に来てもらう等、＜外部の方の受け入れ＞についての記述もみられる。

総体的に地域との連携の取り組みを実施している園自体は少ないものの、実施している園のパターンとしては、①「教育時間後に降園した後、子どもが家庭や地域で経験するであろうこと」を園内または園外で実施する②幼稚園という場でなければできない経験を、地域資源を活用して提供している　という２つがみられる。

また、預かり保育ではなく、全園児が参加する教育時間においては地域との関わりを重視し実施しているとの回答が多いことや保育時間が多く取れる長期休業の預かり保育においては、積極的に園外保育や公園・施設等を活用している記述が多いことから重視していないのではなく、預かり保育における人数の多さ、あるいは利用人数の少なさ、利用する子どもが毎日変わることや預かり保育における時間的な制約等により実施していない園が多いことが伺える。

（10）質を改善する視点と取り組み

自園の預かり保育で大切にしている点や、質を改善するために工夫している点などについて尋ねたところ、以下のような回答が得られた。

『家庭的な環境・雰囲気づくり』『安心・安全への配慮』

「家庭的な雰囲気を大切にし、安心して過ごせるようにしている。」「家に帰ってきたような、ゆったりとくつろげる家庭的な預かり保育をめざしている」「預かり保育も教育活動であることを意識しつつも、家庭的な雰囲気を大切にしている。」等、家庭的な雰囲気を大切にし、長時間保護者から離れて過ごしていることの寂しさを補う心理的配慮や子どもが安心して過ごせることができる環境構成への配慮の記述が多い。教育課程を行う園舎とは別施設で預かり保育を行うことにより園児の生活環境、気持ちを切り替えるように配慮している園もある。また、「長時間での保育活動になるので、事故や怪我などがないよう気をつけている。」「その日の子ども達の体調を注意深く観察し保育内容を調整している。通常保育時間の様子で変わったことがあれば、預かり保育担当者へ引継ぎ、対応に配慮している。」等、長時間在園するため、個々の体調管理や怪我等に対するきめ細やかな配慮を心がける記述がみられた。

『異年齢での関わり』

「異年齢の関わりの中で育ちあうこと。」「縦割りとして異年齢での思いやり、憧れ等の育ちを大切にしている。」等、教育時間では経験できない異年齢の関わりを大切にして実践している記述が多い。

また、人数の増加に伴い子どもがより安心して過ごし遊びに集中できるように、「年長児・年中児合同クラス」「年少児・２歳児合同クラス」と部屋を分け、配慮する園もみられた。

『教育課程とのつながり』

「教育課程に基づく活動から考え方が逸脱しないように、専任担当者にフリーとして学年に参加させることで子ども達の生活や姿を意識できるようにしている。」「通常保育とのつながり。保育者がどちらか一方のみの保育をするのではなく、全体がわかるように配慮。」等、教育課程に基づく活動を基本としながら預かり時間における活動や経験とのつながりを考える園がある一方、「保育時間中に取り組んでいることが継続できる環境の用意と、それとは違う預かり保育だけで取り組める環境の用意。」「通常保育ではできない遊びが広がるような空間にする。」等、教育時間とは違う預かり保育だからこそできる独自の活動を実施する園の記述がみられた。また、預かり保育を教育活動ではなく、福祉活動と捉えている記述もみられた。

『子どものやりたい遊びの充実』

「子ども達の遊びが広がっていきそうな所を見逃さないようにし、新たな環境作り（遊具、用具）を配置するようにしている。」「一人一人が自発的に遊びをみつけ遊ぶことができるよう、環境構成に気を付けている。手作り玩具なども用意している。」「主体的な遊びができる環境と人材育成に配慮している。」等、子どもがやりたい遊びを選択できる環境構成への配慮の記述が多くみられた。子どもの主体性を大切にしながら一人一人が自発的に遊びを見つけて遊ぶことができる環境構成への配慮やコーナーを作り、遊びのスペースを広げるなど時期や子どもの発達に合わせた遊びの計画する記述もみられた。

『保護者への配慮』
「お迎えの時に保護者と積極的にコニュミケーションをとる」「家庭からの連絡ノートを活用して、情報を共有している。」「預かり便りを発行し、ポートフォリオ等で子どもたちの様子や預かり保育の活動を伝える。」「保護者の利用制限を設けない。」「保護者が子育てに対する不安やストレスを解消し、安定した気持ちで育児ができるようサポートする。」等、就労家庭に対する支援や子育てに不安を抱える保護者や家庭に対するサポートに関する記述も多く見られた。

全体的に最も多い記述としては、「家庭的な環境・雰囲気づくり」であった。これは、子どもの精神的な負担を考慮し、預かり保育を「家庭」の代替と捉え、教育時間と預かり時間の動と静のメリハリをつけることにより子どもの生活リズムを整え、子どもの体調・体力・情緒面での配慮によるものである。
また、「異年齢での関わり」の記述も多かった。少子化による兄弟の少なさや地域社会における教育力の低下等の課題がある中で、預かり保育ならではの縦のつながりの経験をさせたいという意図がみられる。
「教育課程とのつながり」に関しては、教育時間の遊びや活動をそのまま展開するのではなく、その経験を生かし発展させていくことを目的に「子どものやりたい遊びの充実」を図るねらいがみられる記述が多かった。特に、子どもの主体性を大切にし、一人一人が自発的に遊びを見つけて遊ぶことができる環境構成や預かり保育ならではのじっくりと遊びこむことのできる活動を重視する傾向性がみられた。
また、「保護者への配慮」として、お便りの発行やポートフォリオ等で子どもたちの様子や活動を伝えたり、家庭からの連絡ノート等の活用により情報を共有し、教育的意図をしっかりと伝えるねらいが伺える点やお迎えの時に保護者と積極的にコミュニケーションをとりながら、保護者が子育てに対する不安やストレスを解消し、安定した気持ちで育児ができるようサポートしようとする配慮が感じられた。

（11）課題と今後の取り組み
預かり保育を実施する上で、各園が課題としていること・今後実施していきたい取り組みについて回答された自由記述を以下にまとめる。

『保育体制の確保と充実』
担当教職員の確保が課題となっている園が多い。子どもが楽しく安全にすごせるように心がけることで相応の教職員数が必要になっている園と、利用人数の増加や預かり保育の長時間化により教職員が必要になっている園がある。また預かり保育への利用満足度が高いと希望者数が増え、担当教職員の増員が必要になることを危惧する園もみられる。
これに対しては「無償化になると、より預かり保育の利用者が増えることが予想されるため、人員確保が大きな課題となってくる。」「預かり保育の時間帯に就労希望者が少ない」等の記述回答があった。
また、年齢が小さい学年の利用人数が増加した時、特別な配慮を必要とする幼児が利用した時、長期期間中の対応など、日や時期、状況によって異なる教職員の配置への対応が課題となっている園も少なくない。具体的な記述としては「配慮が必要だけれども補助金の対象となっていない子どもも多く、該当児が預かり保育を利用する際には人員の配置に苦慮している。」「長期休暇の利用人数は把握できない。受け入れ態勢を見直したい。」などの回答が見られた。
さらに、質の向上という点では、より保育内容を充実させたり保育の質を向上させる上で、専門性を持った職員の確保や、専任や有資格者の確保をしたいと考えている園も見られる。「野外活動や手作りおやつなどに取り組みたいが、魅力的なものにするためには、スタッフが必要。」等の回答から読み取れる。

『教職員の負担感』
　教育時間の担任が預かり保育の担当を兼任している園や、預かり保育の子どもの人数が多い場合に教育時間の担任も保育に入らざるを得ない園では、業務や翌日の準備が終わらないなど、教職員の負担感を課題としている。また、行事前の準備の進行が滞るなど、人員不足により担任が兼務している園では時間の配分が課題となっている。
　具体的には「クラス担任が輪番制で保育を担当しているのでオーバーワーク気味にならないよう注意しているが負担は大きいと思う。専任の担当を探していても困難な状況。」「預かり保育の充実により、担任の兼務負担が大きく事務仕事や保育準備、会議などの時間の確保が難しい。」という回答が見られた。

『担当者間の連携』
　預かり保育中の子どもの様子に関する記録や情報を教職員全員で共有する時間や研修を行う時間を確保することが難しいと考えている園がみられる。子どもへの対応についても課題があり、預かり保育時の子どもの様子と教育時間の子どもの様子が異なり、それぞれの時間の担当教職員間での子どもの共通理解に課題を持っている園もあった。具体的には「教育時間と預かり保育の連携を図るため、ミーティングの時間を確保することや、記録の共有、教育過程の作成などが課題である。」「時間雇用の人達に対して研修を行う時間がなかなかない。」「子どもが教育課程に基づく活動時と預かり保育時では言動に違いが表れるため、クラスでの担任教諭と預かり担当教諭との間に認識や対処や思いの相違があり、連携の取り方に難しさを覚える。」という記述が見られた。

『預かり保育の計画』
　預かり保育の計画の作成が課題としてあげられていた。特に、利用する園児が毎日異なる場合には、計画することの難しさがあるということを記述している園もみられた。教育課程との関連や、全体的な計画のなかでの位置付けなどに課題を持っている園もみられる。
　「独自のカリキュラム作りを作成中だが個人差がありどこまで対応するかが今後の課題」「預かり保育の内容は担当教職員に任せてあるので、園の全体的な計画の中にどう位置付けるか、預かり保育そのものの指導計画や保育記録を、子どもの育ちにどう結びつけていくかが当面の課題」等の回答が記述されている。

『保育環境』
　教室の確保を課題としている園が多い。利用人数増加に伴い、現存の設備では限界があり、保育環境を見直す必要性があげられていた。また、毎日利用・長時間利用・低年齢児の利用等、様々な利用状況に合わせた玩具の数・種類・充実した教材などの工夫が必要であると考えている園や、充実した保育を行っていくための環境を整えていく必要性を感じている園もみられた。
　「今後も希望者が増えることが予想されるので、それに対応できる環境と保育内容の整備が必要」「専用保育室がなく、クラス保育室を使用する為、事前準備、遊びの継続（環境）がしにくい。」という回答が見られた。
　また、人数の関係だけではなく、教育時間の教室を預かりに使うことで、遊びの継続がしづらいという課題を挙げている園もみられた。「共働きの家庭が増え、年々預かり保育の子どもが増えていく中での、ゆったりとしたあったかい居心地の良い環境作りが課題。」等の回答から読み取れるように、幼稚園の預かり保育だからこそという点で、家庭的な環境や異年齢保育を踏まえた環境作りを挙げている園もみられる。

『保育内容』
　保育内容の充実や落ち着いて楽しく遊べるようにすることが、課題や今後取り組みたいこととして挙げられていた。中でも地域との連携や、園外保育の実施などは実施するには

課題が多いが、地域の資源の活用について今後取り組みたいと考えている園がある。また、教育時間との連携を深めていくことや、預かり人数が多くなっていく中で保育内容を見直す必要があると考えている園がみられる。

「子どもの興味のあるものを見つけ出し、発展させてあげたい。」「今後、地域の方や小学校とのつながりも少しずつ考えていきたい。」「降園後の遊び場という視点も入れての預かり保育を実施してきたが、就労する方が多く、今後の需要に対する預かり保育のありかたを考えていく必要がある。」等、現状に見合った保育内容を常に模索している様子が読み取れた。

『子どもの負担』

毎日利用する子ども、長時間利用の子どもについては、心身の負担が危惧されることや生活リズムへの影響を不安視しており、過ごし方についての工夫が必要であると考えている園がある。また、幼稚園の預かり保育の場合、利用する子どもの利用日数も保育時間もバラバラのため、経験の差がでてくるのではないかと考えている園もみられた。

「連日預かり保育を利用している子ども達の中には、ストレスを感じているのか、通常保育では見られないようなトラブルを起こしている場合がある。その場合、預かり専門の職員がいても十分な対応が難しい。」「クラスの様に決まった数、メンバーではなく、利用している時間もまちまちであるためその子によって活動や経験が違ってくるので、個々での対応が必要となり細やかさが必要となってくる。」という回答であった。

『子どもへの配慮』

人数の増加により一人一人への配慮の難しさや、長時間過ごす子ども、支援が必要な子どもへの配慮を課題として挙げている園もみられる。「一人一人の体調や、個性に合わせた対応ができるようにしたい。」「配慮児を預かるときの関わり方の共通理解が必要」「異年齢なので、一人ひとりの体力差や遊びへの興味が違うので、それぞれの思いに寄り添うことの難しさを感じている」という回答であった。

『保護者への配慮』

就労が理由でない預かり保育の利用者が増えている。保護者のメンタルサポート、子どもの育ちに対する手助けも、預かり保育の実施意義になりつつある。

預かり保育の利用で起こる子どもへの影響に対してなど、家庭教育を園任せにならないように、家庭と連携し必要事項を発信していく必要性を挙げている園もあった。「本当に預かり保育が必要な保護者なのか、こちらでは判断できかねる部分がある。」「母親の心の安定のための預かり利用が近年増えている。」「無償化後の預かり保育利用料の不平等感の問題が心配」など具体的な回答が見られた。

『予算・補助金』

「職員の配置では利用者増に対応が必要であるが、経済的に厳しい。」「家庭的な面を重視しているので、人数が少ない時は近隣のお店に買い物に行ったりお菓子を作ったりなどできるが、それなりの人数になるとそうした活動が難しいので、予算がつくとありがたい。」等の回答から読み取れるように、人件費や教材費についての負担感を感じている園が多い。

『その他』

幼稚園として「預かり保育」そのものをどう考えていいのかという問題、つまり幼稚園教育と家庭教育、預かり保育の園としての理想的なあり方が難しいと考えている園がみられる。子どもを第一に考えているが故の課題であることがわかる。

そのほか、保育の質を高めるために預かり保育の研修会に参加したい、保護者の保育参加を実施したいと考えている園があった。具体的に「家庭的な雰囲気と集団での保育であ

ることのはざまでの保育はいかにあるべきかをつねに考える。」「保護者の用事や仕事において実施してきたが、保護者の子育て支援・園児の支援の面でも考えていく必要性を感じる」「預かり保育時の災害が起きた時の対応についても、その都度預かり担当教諭も含めた訓練などの必要性を強く感じる。」という回答があった。

さらに、学童希望者に増に伴い、地域のニーズとして小学生（卒園児）への対応希望もあるため、課題としてあげている園も見られたので付け加えておく。

２．質問紙調査を踏まえた事例収集

調査の分析を通して得られた知見より、預かり保育の実践上の配慮事項において、環境構成や実施体制の工夫が見られた３園より聞き取り調査を中心に事例収集を行った。その中から、多くの園が最も大切に考え心がけている「家庭的な雰囲気を大切にする保育」について具体的な活動に取り組んでいる１事例と、預かり保育の活動内容や環境について独自の取り組みをしている２事例を選び、聞き取り調査を行った。

事例１：幼稚園における預かり保育の環境作り　～子ども達の心に寄り添う工夫～

○工夫している点、及び配慮している点

夕方になると変化する長い影に入りながら…異年齢の子どもたちが集まって「あぶくたった」先生が鬼だよ！

① 預かり保育の前半時間は、体力的な事を配慮
学年ごとに、年齢に合わせた場所と時間を確保する配慮をしています。

② 好きな遊びに夢中になれる場所を提供
自分のペースで動きたい時間である事を考慮し、窮屈な時間にならないよう、室内のみならず園庭にも担当職員を配置して、安全を見守りながらも、好きな「遊び仲間」（兄弟のような関係性）と共に活動出来る環境を心がけています。

③ おなかも心も満足して欲しい
小さなおにぎりや果物等（夕食に支障のない量）の家庭的なおやつを提供しています。

④ 人数が少なくなる時間こそ、温かい雰囲気を大切に…、預かり保育の後半時間は、家に居たら兄弟や家族と群れて遊ぶほっと出来る時間である事を想定し、預かり保育専用の部屋でみんなと過ごし、お迎えを待ちます。

後半時間はおこたつに見立てたコーナーが登場。ここは皆の大好きな場所。
ゴロンと横になると「きもちいい～」そうです。

この時間、保育者はふれあいを増やす事を念頭に置き、一緒に寄り添いお話をします。また、ゴロンと横になるスペースを作り友達と群れたりしながら、更にちゃぶ台を出してゆったり過ごせる雰囲気作りをしたりして、子ども達が淋しくなる時間に寄り添える工夫をしています。園に長い時間居てもこんな楽しい場所で遊べる…。そんな気持ちをつくる環境です。

先生と一緒にゆったりとパズル。
甘えられる時間も大切です。

＜まとめ＞
　預かり保育の流れを「前半」「後半」に分け、「前半」では一人ひとりのペースに合わせて室内や室外で自由に遊べるように場所や時間を確保している。また、担当職員をそれぞれの場所に配置して、安全面を考慮しつつ指導したり一緒に遊んだりしている。
　「後半」では、家庭的な雰囲気づくりを意識し、寝転がることができるような居心地の良い環境を整え、みんなで一緒にゆったりと過ごせるように工夫している。特に人数が少なくなる時間には、子どもが寂しさを感じないために個別に丁寧に関わることを意識した配慮を行っていることが分かる。

事例２：預かり保育の特性を生かした、意味ある経験

【目的・ねらい】
午前中は比較的同年齢での遊びが多く展開される中、午後は異年齢の関わりによって刺激を受け合ったり、助け合ったりと、預かり保育ならではの貴重な経験ができる時間である。また、午前中の集中や活発な活動による心身の疲れをいやすためにゆったりとした流れの中で、自分のペースで安心して過ごせる午後のひと時でもなければならない。
　更には、園で遊ぶ時間の長さや、先に降園する友達と残る自分を比べて感じる繊細な感情にも配慮するとすれば、午前中には経験できない遊び環境を工夫し、預かり保育の特別感を演出するのも保育者の教育的配慮と考える。そのようなねらいを持って、安全・安心を基盤にしながらもその事だけにとどまらず、子どもたちが育ち合うことを目的に、体験の場として預かり保育を位置付けている。

【内　容】
１．預かり保育だけで遊べる遊具～積み木・造形粘土
　＜環境構成や配慮＞
・その日の人数によって２～３部屋に遊びのコーナーを作るが、子ども達の希望を聞いて『積み木』だけの部屋を設ける事もある。同じ興味を持った子たちが集まって、数や空間スペースの制限を気にせずに遊べる環境を作る。
・一日を飽きずに過ごせるように、通常では遊戯室や園庭で全身を使って遊べる時間と、部屋でゆったりと遊べる時間の両方を流れに組み込むが、積み木等は、子どものイメージによる完成と満足のタイミングまで時間を延長することもあり、子どもの様子に合わせて、柔軟に組み替えていけるのも預かり保育の良さである。

　＜効果＞
・「預かりより、お迎えがいい。」という子どももいるのが当然ではあるが、「預かりにしてほしい。」と親に要求する園児が増えた。
・充分にある時間と空間の中で、（写真）満足するまで自分の作品に熱中したり、らせん状に倒れずに積み上げる方法を発見したり、何処まで高くなるかと挑戦を続けたり、邪魔されない空間の中で自然と協力が生まれたりと、育ちに繋がる経験の様子が多く見られている。
・個人持ちの粘土より、こしの強い粘土で立体的な造形を楽しみ、得意な子は黙々と作品作りに打ち込んで、自分の特技を発揮していた。

２．自分のしたい遊びをじっくりと

＜環境構成や配慮＞

・子ども夫々の多様な興味に合わせて、多様な遊び環境を用意する。
・夫々が遊びこめる遊具の数に配慮する。
・利用園児の多くは、毎日の生活の一部なので、「あの遊びができる。」という、いつも通りの安心感と共に、飽きずに過ごせる新規な体験を常に盛り込んでいる。
・保育者が常に全員に目が行き届くよう、子ども自身で遊びを展開できたり、子ども同士で教え合えるような提示の工夫をする。

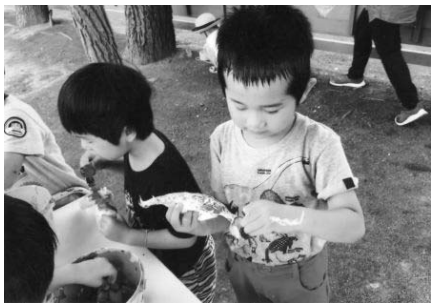
○はさみ

・自然の図鑑で雪の結晶に興味を持った子に対し、折り紙での結晶作りの工程を、一工程ずつ貼って示した工程表を用意した。

○花　紙

・運動会の入場門に使用するお花作りを、子ども達を見ながら片隅で楽しそうに作る保育者。
その様子を見て「やってみたい！」という子が出るのを待つ。保育者がモデルとなり、子ども自らの動機を引き出す。お手伝いも楽しい遊びとなる。

○はりこの恐竜作り



・恐竜が大好きな幼児達。保育者が何気なく恐竜を作っていると、「なにやってるの？僕もつくりたい！」とやってくる。基本となるポイントだけを教えると、後は自分流に試行錯誤しながらつくり、「先生、青い絵具もだしてー。」と自ら要求。のりまみれ、絵の具まみれになっても、外だからと遠慮せずに没頭できる。夏の遊びは水遊びだけではないという一例。

＜効　果＞

・午前の保育だけでは達成しきれない遊びを満足行くまでじっくりと満喫することで、情緒が安定したり、興味の広がり、集中時間の持続、手先の巧緻性や道具の操作性等も、更なる発達が感じられる。
・新しい経験にワクワクしたり、ある時はいつもの落ち着ける遊びでくつろいだりと、その子の今に合わせて選択できる事や、何かしらやりたい事が見つけられる遊具の数と種類によって、目的なくフラフラする子や、子ども同士のトラブルが減り、全体が落ち着いた空間になっていった。
・午前中の遊びを預かり保育の時間に更に発展させる子や、逆に預かり保育で経験したことを次の日にクラスの友達に伝える子等、遊びが連動して広がりをみせている。保育者が情報を共有している為、連動が起こりやすいような意図的な物の準備がされたり、ルール説明を子どもに任せる等の経験のチャンスを増やすことができている。

３．異年齢の関わり

＜環境構成や配慮＞

・低年齢の子だけの力では少々難しい箇所のある製作や、年中・長児が部分的に経験済みな遊びの材料を置いておく等、『教えてあげたい』という気持ちが誘発される環境を工夫する。（※写真１：メダル作り、写真２：ハサミ）
・ルールを柔軟に変えれば、どの年齢でも遊べるような仲間あそびを提案したり、必要な物を準備する。
・鉄棒・跳び箱・縄跳び等、年長児の運動能力をおもいきり発揮できるよう遊びのスペースを分ける事もある。その姿を見て憧れる・真似てみるという経験に繋がる事もねらっている。
・自分から関わりのきっかけを作れない子もいるので、トイレの行き帰りやおやつの座席を共にするペアをくじで決める遊びも時々取り入れるようにする。

＜効　果＞

（写真１）

・製作では、自然と手助けする姿が見られるようになる。回数を重ねるごとに、やってあげる姿から、自分の力で出来るようにと言葉で説明したり、見本を見せたり、本人がやりやすいように押さえてあげたり（※写真 1）という姿へと変わって行く。小さな子の気持ちを推測し、相手の立場になって手助けする事など経験を通して学んで行く子ども達。

・年少児が進級すると、自分がしてもらったようにお世話する姿が見られるようになる。また、新入園児が慣れない４月には、手をひいて保育室まで連れて行ったり、靴をはかせてあげたりと、自発的に気にかける様子も見られ、子ども達の育ち合いを実感する。

（写真２）

・次の年に入園を考えている子どもたちが自由に参加できる保育公開日には、年長児が考えた『お店屋さんごっこ』や『お祭りごっこ』等が行われる。品物を考案する段階では、「小さな子だから、口に入れたら危ないかも・・・」や「これなら喜びそう」と、様々な視点からの予測で話し合いが進む。そして、当日は、自然と腰をかがめて、小さな子の目線に降りて話しかける姿が見られる。年長児の 6 割以上が預かり保育の常連であり、そこでの経験が社会性の発達に良い影響をもたらしていると思われる。

・年長の１２月には、就学に向け小学校へ出向いて１年生との交流がある。初めての人・場所に緊張する子もいる中、預かり保育を多く経験している子は、一緒に過ごしていた元年長さんとの再会に大喜びする。就学に対しての不安よりも期待が大きくなり、幼小連携の垣根も低くなっている。

事例３：質の高い預かり保育を目指して～柔軟な工夫とその効果の事例～

１．兄弟姉妹の受け入れ事例

私立幼稚園が、地域のセンター的な役割を担うにあたっては様々な活動が行われているが、条件が整わず実施できない園もまだまだ多い。次に紹介する事例では、預かり保育の時間に未就園児・小学生（卒園児・兄弟姉妹）も受け入れ対象にし、毎日の生活を通して交流を行っている。

限られた年齢ではなく、幅広い異年齢交流ができ、人間関係や社会性の育ちにおいて、相互に成果が期待される取り組みであると考えられる。

＊受け入れの経緯

①女性の社会進出の増加は、学童保育利用希望者増と施設不足から待機者増を招いた。子育て支援の観点から課題解消の一助になればと小学生兄姉を預かり保育の時間帯に受け入れることとした。

②異世代交流の機会や経験に乏しい現代の子ども社会にとって、園児と小学生だけでなく、未就園の弟妹や幼児教室在籍者と共に過ごす幅広い年齢の交流経験は、相互に計り知れないほどの人間関係や社会性面での成果が得られると期待してのスタートであったが、今は、期待は確信に変わっている。

＊実施による効果

①小学生の兄姉について

・利用者の大半は卒園生であり、懐かしい園に戻れる喜びは大きい。
・園は卒園生の成長を身近に観られる喜びがある。
・「おかえり」の声で迎えられ、まずは宿題を済ませてから（声かけはするが自主性に任せている）園児と共におやつを済ませ、園児との交流タイムを楽しんでいる。
・先生の手伝い（おやつの配布や片付け、イス並べなど）に積極的に参加し、信頼され任され役に立つ喜びを感じる。（先生も意識して小学生の活躍の場づくりをする）
・自由遊びでは、鬼ごっこ（はじめの一歩など）やボール遊びをして遊ぶ中で、リーダーや世話役の喜びを経験し成長につなげる。
・園児は新しい遊びや刺激を兄姉からもらい、経験の幅を拡げる。

②弟妹との交流について

・弟妹は年上の兄姉に可愛がられたり、知らない遊びに参加し経験を拡げる。
・園児は未就園児や弟妹のお世話を喜び、小さいお友だちへの思いやりや優しさの気持ちを育み、お兄さんお姉さん役の自覚や責任感を楽しく経験する。
・未就園児にとっては入園前に園や園生活の雰囲気になじむことに入園時の不安が軽減され園に慣れることができる。

＊実施して思うこと

地域で異世代交流を楽しむ中で、子どもが子どもらしく切磋琢磨する中でたくましく育つ場所や機会を持つことが難しくなった時代だからこそ、このような機会を作ることの大切さを痛感している。

また、このような柔軟な対応が可能なのも私学のよさではないかと考える。

「ただいま」「おかえり」のあとは、自主的に宿題。
「お兄さんの宿題はどんなかな？」
周りに集まる園児たち。

＊仲良し交流タイム

小学生・在園児・未就園児という幅広い異年齢の関わりを楽しむことができる。

小学生がリーダー的な存在として遊びを展開し、世話役の喜びを経験し成長につなげる。

在園児・未就園児は新しい刺激を受け、経験の幅を拡げる。

幼稚園の預かり保育が、昔ながらの地域交流の良さを経験する役割を担っている。

２．外部交流・地域交流の受け入れ事例

預かり保育の保育内容については、各園で様々な取り組みが見られたが、担当職員の確保や保育室の条件によって、限られた活動のみを強いられることも少なくない。中には、毎日利用や長期休暇中で預かり時間が長くなる園児もいる中で、家庭で過ごす子どもと同じように、地域交流や外部機関との交流を実現するには、どの様な取り組みが出来るのか模索している園もあった。

次に紹介する事例では、活動の場所・交流対象を幅広く取り入れ、教育時間とは雰囲気の異なる経験が出来るように工夫している。また、活動内容を幼稚園だけで終わらせず、体験した子供たちが家庭に持ち帰り、保護者と共有できるように発信しているところも、私立幼稚園が家庭と共に子どもたちを育てるという姿勢を大切にしていることがわかる。

＊実施の経緯

預かり保育の計画は、子どもの体調や教育時間の内容や過ごし方によって、柔軟に対応するものとしている。園と連携し、園庭、ホール、プール(7,8 月)などを有効に利用し、季節を感じられる遊びや教育時間とは違った雰囲気の活動、家庭に早く帰宅した子どもが、家庭や地域で体験するであろう内容も取り入れるようにした。栄養士の協力のもと「そうめん流し大会」「ハロウィン・クッキー作り」「クリスマス会・クッキー作り」「年長さんを送る会・給食の先生への感謝の会」を行っている。ハロウィンの時には、手作りの衣装やバッグを身に付けた子どもたちが、給食室にクッキーをもらいに行く。ハロウィンやクリスマスのイベントでは栄養士や調理師も仮装したり、行事にちなんだおやつをラッピングしたりと、子どもたちが喜ぶアイデアを提案して盛り上げてくれるようになった。

（外部交流）

・今年度より、6 月から月 1 回、地域ボランティアの方が絵本や紙芝居の読み聞かせを行っている。
・バレーチーム、ラグビー（選手との交流、バレー・ラグビー体験）
・人形劇　（大分県や市の活動を利用）
・地域のお祭り　（地域の祭りの日に神輿が園に来て見学）

預かり保育での活動（にじいろタイム）の様子

＜流しそうめん＞

＜アイスクリーム屋さん＞

＜ハロウィンパーティー＞

＜ラグビー日本代表選手との交流＞　＜バレーチーム選手との交流＞　＜読み聞かせボランティア＞

＊預かり保育で地域交流等を実施して見えた効果と課題

・部屋だけでなく、園庭やホール、夏はプールなど色々な場を使うことで活動の幅が広がった。

・活動内容を工夫することで、毎日預かり保育を利用する子どもも楽しみに預かり保育の部屋に来るようになった。教育時間とは違った雰囲気の活動では、特にわくわくした様子で喜んでいる。

・外部交流や地域との交流、市の取り組みの活動などの機会を利用することで多様な体験ができるようになった。

・活動内容が多い中で準備等を進めているため、準備不足な点が出ることもあったが、準備内容を早めに確認し、準備の時間を確保できるようにしていきたい。

・食べ物が関わってくる行事（流しそうめん、ハロウィンやクリスマス会のクッキー）では特に、職員間や栄養士との連携をとるために話し合いを早めに行い、アレルギー対応を確実にしなければならない。

地域のお祭りへの参加や読み聞かせボランティアの来園など、預かり保育で子どもたちが経験したことを、保護者へお知らせしている。家庭と情報を共有することで、子どもたちの育ちを豊かにするだけでなく、保護者の子育て経験に対しても一助となる。

★その他の工夫と効果の様子

＊教育時間とは異なる空間であることを大切に

教育時間のスペースから預かり保育のスペースへ向かう途中に各自のロッカーが設置されている。制服から普段着に着替えて預かり保育の時間が始まる。

＊家庭的な環境・雰囲気作りにする工夫

家庭的な環境を作ることと信頼できる先生の存在で、安定した気持ちでゆったりとした時間を過ごすことができる。

子どもの小さな変化に気づけたり、クラス集団では見られない個々の良さを発見できる。

＊１人でじっくりと取り組む時間を確保する工夫

手作りパソコンに向かう女児・土だんごに黙々と砂をかけている男児。長時間利用や毎日利用の子どもたちの心身の負担・生活リズムへの影響を配慮し、一人静かに取り組む時間を十分に確保する。

＊仲間との触れ合いを楽しめる空間を確保する工夫

教育時間とは異なる、預かり保育独自の人間関係が築かれている園もある。

固定メンバーを中心にして、縦横のつながりが強化されたり、通常とは違う関係が築かれ、教育時間には見られない個々の力が発揮される場面も見られる。

午睡は年齢や時期によって確保する園もあるが、設定しない園でも子どもたち心身を休めながら過ごせるような空間を構成している様子がうかがえる。

＊好きなことにじっくり取り組める
時間・空間・仲間がみつけられる環境作り

新しいことに挑戦する機会が増えたり、継続的にじっくり取り組める時間が確保できるため、遊びが活発になり意欲が育っている。

計画を細かく決めないことで、遊びの種類が豊富になり、遊びこんでいる姿が多くみられる。教育時間にできなかったあそびを選び、集中して取り組んでいる姿も見られる。

Ⅳ.　研究のまとめ

１．研究結果から分かること

１）対象園属性調査から

ａ．時間数

私立幼稚園（学校法人立園）の中で、私学助成園、新制度における給付園、幼稚園型認定こども園を対象として、全国から任意抽出した私立幼稚園 300 園について、その 91%である 273 園から回答を得たが、その中で、預かり保育を実施している園は、98.9%の 270 園において預かり保育が実施されていた。平成 28 年度文部科学省調査では 96.5%であるので、さらに預かり保育はその後の実施率は増加の傾向にある。

預かり保育の実施形態は、従来の私学助成に位置づくものと、新制度の一時預かり事業としての形態があるが、私学助成型が 176 件 62.5%であり、新制度一時預かり事業型は、94 件 34.8%であった。預かり保育だけの制度移行は可能であるが、なぜ移行していないかの理由は調査されていないが、実態として、従来の私学助成での実施が大多数であることを記しておく。また、預かり保育の利用実態は、各園の平均から考えると全園児のおよそ 24%となっていることから、4 時間の教育時間で降園する園児が多いということがいえる。

一方で、利用時間数で捉えると、午前 8 時前からの受け入れをしている幼稚園が全体の 78.5%。17 時 30 分以降まで実施している幼稚園が 75.2%となっている。これは全国で保育所を利用している利用時間帯（平成 27 年地域児童福祉事業等調査）の大半をカバーしている時間数である。

世帯の保育所等利用開始時刻と終了時刻

		保育所等利用開始時刻					
		総数	～7:59	8:00～8:59	9:00～9:59	10:00～	不詳
保育所等利用終了時刻	総数	100.0%	19.5%	61.1%	19.1%	0.3%	0.0%
	～15:00	1.8%	0.2%	1.1%	0.5%	0.0%	0.0%
	15:01～16:00	14.8%	0.9%	8.9%	4.9%	0.0%	0.0%
	16:01～17:00	30.5%	3.0%	20.0%	7.3%	0.1%	0.0%
	17:01～18:00	38.9%	9.8%	24.0%	5.0%	0.1%	0.0%
	18:01～19:00	13.0%	5.2%	6.6%	1.1%	0.0%	0.0%
	19:01～	0.9%	0.3%	0.4%	0.1%	0.0%	0.0%
	不詳	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

出典：平成27年地域児童福祉事業等調査

ｂ．預かり保育担当従事者の資格

預かり保育従事者で特徴的であったことは、ほとんどが幼稚園教諭免許状か保育士資格を有しているということである。また、免許資格の併有が預かり保育を担当していることも多いことも特徴的であった。さらに、3 歳以上の預かり保育であるにもかかわらず、従事者 1 人あたりに担当している幼児は、10. 34 人であり、保育所の３歳児クラスの配置基準

の１対 20 よりも手厚い職員配置がなされていることが伺えた。さらに、幼稚園教諭免許状と保育士資格所持者と預かり保育の計画作成については、母数は少ないものの優位な関係にあることが見て取れる。【Ⅲ－Ⅰ(2)考察②】

総じて、外形的にも質の高い預かり保育が実施されている可能性が高いことが示された結果となった。

２）内容・質に関する調査から

ａ．重視されていること

教育課程と預かり保育の連携という視点からの調査では、重視している傾向の園が 70.4%となっているが、重視していない残りの園の理由を確認すると、預かり保育は家庭の代替と捉えている園が多い。その解釈は、逆に言えば、教育課程とのつながりをあえて切ることによって子どもの生活そのものを成り立たせようとの考えのもとにあり、その意味ではほとんどの園が教育課程とのつながりを意識して預かり保育を運営していると言える。

多様な預かり保育の形態が見て取れるものの、その中で共通して貫かれている点は、長時間にわたり私立幼稚園という幼児教育施設で過ごす幼児の心身の安心と安全という視点と意識をもって、実践がなされている点である。健康状態やけがの状態についての引継ぎや情報共有は、集計結果とその理由をみると、ほとんどの園で行われている結果が表れた。

また登園から降園までの幼児の生活全体を捉えるという視点は各園が工夫しており、教育時間と比べて、預かり保育はゆったりとゆっくりと過ごす配慮は、各園が意識している。

次に大きな特徴となっているのは、教育課程で示される４時間の「教育時間」と、教育課程外の教育活動である「預かり保育」とが組み合わせて実施されていることにある。

例えば４時間の教育時間と 4 時間の預かり保育を実施している私立幼稚園では、どちらも利用している幼児については 8 時間という視点からの、保育所保育指針でいう「養護」的な配慮が土台になりつつも、どの私立幼稚園においても 4 時間の教育時間が終了した後に、一旦、生活に節目を入れて区切った後に、その後の 4 時間の預かり保育に移行している。このふたつの形態をどのように組み合わせているかが、幼稚園での預かり保育の大きな特徴的として捉えられる。

その私立幼稚園において、預かり保育まで利用する幼児は、どのように過ごすことが望ましいのかを各私立幼稚園は考えており、それぞれの預かり保育がデザインされている点は特徴的である。その在り方は実に多様である。

教育時間としての終了時に保育をいったん区切ること、そして、次にそれをどのように預かり保育の時間に繋げていくのか、その区切り方も繋げ方も多様であり、たいへん興味深い結果を得ることができた。

ｂ．預かり保育の役割と形態

教育時間後の預かり保育の実施にあっては、預かり保育をどのような意味づけをするかによって形態が変化してくる。調査の結果として、おおよそ以下の３つの考え方に分類できることが分かった。

１．家庭的な役割を担うもの
２．地域の公園（あるいは、かつての路地裏のようなスペース）のイメージをもって、幼稚園のクラスを越えた個々の自由な出会いの場として用意するもの
３．教育時間からは違うスタイルではあるが、教育時間との連続性を主としてイメージしつつ環境を用意するもの

また、預かり保育の実施形態としては大きく次の３つの配慮が確認できた。

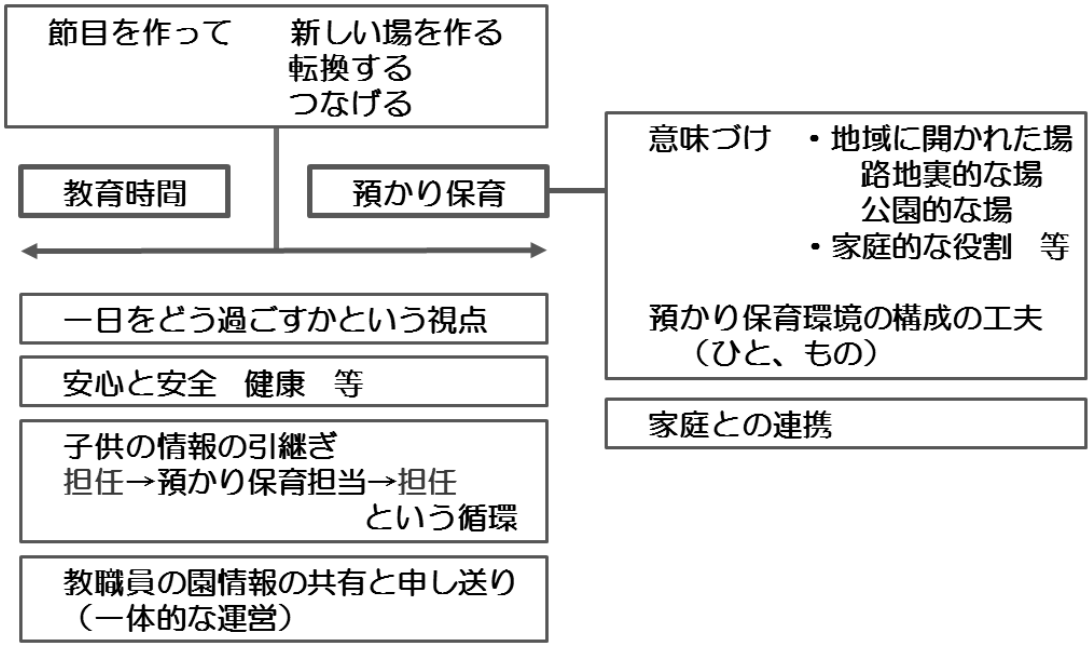
A．教育時間のクラスにしばられないという視点と、さらに在園児のみならず地域の幼児での出入りも含めた異年齢の生活をイメージした縦割り形態での生活を組み立てるケース。
B．教育時間のクラスには同様にしばられないものの、同年齢の幼児同士の関りを中心とした生活を組み立てるケース
C．人数規模に対する配慮として、幼児が落ち着いて過ごせる場のゆとりを確保しつつ、保育者が十分な対応をすること、一人一人に応じた丁寧な対応をするために、保育室あたりの人数をコントロールしている。

２．幼稚園における預かり保育の在り方

１）預かり保育の特徴

今回の調査では幼稚園で実施される預かり保育の特徴も浮かび上がった。
それは新制度における 2 号子どもに相当する幼児の人数が、預かり保育全体の利用者とイコールではない点である。前述したように地域によっては、専業主婦が多い園であったり、保育の要件に満たさない短時間のアルバイトをしていたりして、預かり保育に参加する幼児の人数が日々変化したり、メンバーが入替るということを指す。そのために、日々変化する幼児集団となっている。
これは預かり保育の計画の実施率が必ずしも高くないという結果にもつながっており、毎日、誰が利用するのか分からない状況での計画が立てにくいという理由が挙げられている。
以下、今回の調査から見えた預かり保育についてのイメージを示し、解説する。

教育時間と預かり保育についてのイメージ



２）教育時間と預かり保育を区切る意味とその方法について

教育時間と預かり保育をはっきりと分けて考え、実施している点は、すべての私立幼稚園に共通している。その区切り方は、様々であった。

それだけ教育課程に係る教育時間は、密度の高い教育的な営みが実施されているということであり、その後の時間は、いわゆるゆったり過ごすという一定の緩やかさをもった環境構成や時間がながれるような意図をもった工夫がなされている。

また、預かり保育を利用する幼児は、私立幼稚園においては、必ずしも毎日同じ参加者になる訳ではない。その意味においては、日々、違う幼児同士が生活をすることになり、教育時間とは違う雰囲気になることは前提となっているが、以下、幼稚園においては、様々な工夫をして、教育時間と区切ることで、預かり保育に新たな意味を持たせる工夫をしている。

以下、区切る工夫という視点から主なものを示す。

１．服を着替える
２．教育時間で利用した保育室の環境を変化させて雰囲気を替える
　　（コーナーの位置や内容を変化させる。模様替えをする）
３．挨拶で気持ちを替える（「おかえりなさい」など）
４．パターンをもった儀式的な活動で替える
　　（預かり保育の初めに必ず絵本などの読み聞かせをしてからスタートする）
５．保育室を替える
　　（専用の預かり保育室や別棟の預かり保育施設への移動をしての切り替え）
６．先生を替える（預かり保育専任が担当する）

３）教育時間と預かり保育をつなげる工夫

教育時間と預かり保育は全ての私立幼稚園で区切っている訳であるが、一方、その連携や連続性についても配慮されていることは興味深い。

まず、それぞれの役割は分かれているが、運営は一体として同一法人が実施しており、同じ幼稚園の教職員のチームによって保育がなされていることが前提である。そのため一貫した幼稚園としての考え方の元に保育が続いている意味では、連続性が担保されている。

それは教職員同士のリレーションに端的に表れていて、教育時間での出来事（けがの有無や体調面）や保護者に伝えたいエピソードなどが引き継がれている。

さらには、教育時間を担当する教員が預かり保育へと繋げたり、その様子を見に行くなどの繋がりを持ったりする配慮をする園もあった。環境を変化させて区切る場合に、保育者が繋がりを維持したりする工夫でもある。

４）情報共有の実際や意味

今回の調査では預かり保育における記録や園内での情報共有の実際についても調査を実施した。

その結果、１．幼稚園全体として情報を共有するもの　２．教育時間での情報を預かり保育につなげるもの　３．預かり保育での状況を担任につなげるものという一連の流れが見て取れた。

特に３にあたる預かり保育の記録が翌日の保育を担当する担任へと、様々な引継ぎに利用されているケースでは、具体的には、幼児の心身の状況、配慮したこと、友達同士のト

ラブルへの対応、遊びの様子など多岐にわたって引き継がれている。教育時間は担任が受け持つというという意味で、担任が責任をもって教育時間の保育をするために、さまざまな情報が集約されているものと思われる。

また幼稚園としての全体的な情報が、分担する部分はそれぞれであっても情報共有するための仕組みがあり、行事の意味や段取り、配布物の内容、感染症の状況など多岐に共有されている。共有の方法も朝終礼の時間の活用、壁面の掲示、ノートやファイル、ICT 利用、また口頭で実施しているケースなど、内容のみならず、方法も多岐にわたって工夫されている。園によっては確実に伝達することと記録を兼ねて、復習の手段を用いた情報共有を実施している園も少なくなかった。

５）預かり保育の多様性

預かり保育の在り方は、多種多様であることが見て取れた。もともと私立幼稚園（今回の調査対象とした私学助成園・新制度における給付園、幼稚園型認定こども園：以下、私立幼稚園）は、幼稚園教育要領に依拠しつつ、それぞれの幼稚園の建学の精神や教育の理念によって幼児教育実践を実施しているため、ひとつひとつが個性をもっていることは明白である。さらに「預かり保育」を含めた視点から見てみると、さらにその独自性が見て取れる。

その大きな要素として、私立幼稚園は地域に根差していることがあげられる。私立幼稚園はその土地に生まれ、その地域との強いつながりがあって成り立っているからである。

「教育時間後に降園した後、子どもが家庭や地域で経験するであろうこと」を園内または園外で実施するケースとして、地域に居住している幼児・児童での異年齢集団を想定した遊びを再現するための異年齢集団の形成を意図したグループ編成をする。児童館、図書館、公園に出かけていって交流をしたり、施設を活用したりする例がみられた。

また、幼稚園という場でなければできない経験を、地域資源を活用して提供しているというケースとして、地域に幼稚園を開いて、来園いただきお茶会や読み聞かせをしてもらうような形態をとる場合もあった。

当然、預かり保育の実施においても、地域文化や自然環境、地域産業やその域内での仕事の仕方、住宅事情などの影響を受けることとなる。今回、地域属性の調査は実施していないが、家族が家業を中心にして仕事をしている地域や商店街が多い地域などで、母親の就労実態割合が高い場合は、預かり保育に参加する幼児はだいたい同じメンバーになり、一日の全体を見通した養護的な配慮が中心になってくる。一方で、片方が仕事に出かけ、片方が家庭を担当する家庭が多い地域の場合は、イレギュラーなメンバーが多くなることで、幼稚園での生活からの連続性を意識した環境の構成を重視するなど、それぞれの地域のニーズに合わせた運営がなされているものと考えられる。

３．課題と展望

預かり保育は、4 時間の教育時間を中心とした幼稚園教育を中心として、保護者の就業等のニーズの変化、少子化による同世代の地域人口の減少、地域で幼児が過ごす時間や場所としての安全確保などの課題にも応える形で組み立てられてきた。

今までも保護者がお迎えに来るまでの時間をどのように過ごすことがよいかを、各園が自立して考えてきて、その園らしい預かり保育を実施してきたが、女性の就労率の上昇による預かり保育利用者の急激な変化や、「一時預かり事業」（子ども・子育て支援新制度）の制度が始まったことでの対応など、預かり保育を取り巻く状況が急激に変化していく中で、各園がどのようにすることが、子どもによってよいのかを試行錯誤し模索している。

具体的には、保育者の確保については、保育所だけの課題ではなく、幼稚園にとっても

切実な課題である。とはいえ、専業主婦層もまだまだ多いことから、預かり保育の利用者数が日々変化することは、人の配置という側面のみならず、預かり保育を組み立てる上での課題となっている。

もともと今までの幼稚園にはなかった時間軸の伸長、年間開園日数の伸長、とりわけ長期休業中の対応など、従来の幼稚園教諭での勤務の外側にあった時間帯の預かり保育の課題が解決できていない部分もある。一方で、働き方改革という課題もある中で、保育者の多様な働き方をどのように作り出せるかは、重要なテーマである。

環境構成においても、利用人数の増加によって、クラス集団で計画されている保育室をそのまま預かり保育の場所とすることには、幼児にも保育準備という側面からも限界が有り、預かり保育で過ごす場所を、さらにどのように確保するかも課題となっている。また、特別な支援が必要な幼児に対する対応も、制度としても実態としても 4 時間の教育時間に比べて十分ではない点も課題である。

一方で、地域の実態にあわせた多様な預かり保育の存在は、かけがえのないものである。各園が多様性に富んで、しかも保護者に園選択の自由が保障されていることは、教育的な側面からも重要である。

教育要領の改訂を機にして預かり保育の記述が充実したことから、さらに地域との繋がりを重視して、開いた場として考えたていきたいとか、夏期に学童保育を合わせて考えたいなどの預かり保育をさらに充実させていこうとする園も出てきているので、今後とも、それぞれの地域において、預かり保育をどのように整備してくことが、子どもの最善の利益を保障することになるのかについて、地域が一緒になって考えていくことが、ますます重要になっていくものと思われる。

おわりに

この分野についてはこれまで私立幼稚園や認定こども園において、十分な調査研究がなされてきませんでした。本調査研究において、地域や施設類型、園児数など条件が異なる、全国の私立幼稚園における実態を抽出調査し検討することができました。

本研究で示唆されたことは、各地域や園の実態が異なる中においても、すべての項目で教育課程に係る時間といわゆる預かり保育の時間の保育の連続性が意識され、意図的な計画や配慮が実施されていることです。

例えば、指導計画においても連続性の中であえて「違い」や「ゆるやかさ」を意図する実態や、子ども集団構成の違いに応じた内容の検討がなされ実施されていることが分かりました。

また、担当者が交代することが多い中で、子どもの心身の状態の引き継ぎの重要性が認識され、その手続きや活動内容にも工夫がなされていることも分かりました。

本調査研究により、子どもの発達と生活の連続性を意識し、家庭と地域そして園生活との連続性を中長期的な視点で計画し実践することの重要性が一層示唆されました。さらに、計画や記録の在り方には検討の余地があり、家庭や地域との連携を充実させるためにもその確度を高め「見える化」する工夫の必要性も示唆され、この調査研究の内容が、各園ならびに各地域で計画や実践の質向上と充実にいかされ、この分野の研究の基礎資料となり検討が進むことを期待します。

最後にご協力いただきました各園ならびに、調査資料の分析ならびに検討にご協力いただきました各位に感謝申しあげます。

公益財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

理事長　東　重満

参考質問紙調査用紙

ご注意

・一時保存の機能はございません。

・**一度ご入力いただいた場合、必ず最後までご入力いただいた後、「アンケートの回答を送信」のボタンを押してください。一度送信いただいた後の修正はできませんのでご注意ください。**

・メールアドレスのお間違えがないようにご記入ください。

・メールアドレスや数値等は半角でご記入ください。

・何かご不明なことがございましたら、下記までご連絡ください。

・満3歳児は3歳児に含みます。

・選択項目、数字の入力部分については必須回答になります。

info@youchien-kikou.com
03-3237-1957

ご回答者様の連絡先をご記入ください。

メールアドレス

xxxxxx@gmail.com

設問1 園の基本的事項

(1)都道府県

都道府県

(2)園名

○○○幼稚園

(3)学級数

3歳児学級 ＿＿学級　4歳児学級 ＿＿学級　5歳児学級 ＿＿学級

備考

(4)園児数【平成30年5月1日現在】

3歳児 ＿＿人　4歳児 ＿＿人　5歳児 ＿＿人

(5)自園の運営形態

○ 私学助成園　○ 施設型給付を受ける幼稚園　○ 幼稚園型認定こども園

設問2 預かり保育の現状

(1)預かり保育の実施

● 実施している　○ 実施していない

「預かり保育の実施」の回答が「実施している」方のみ、お答えください

(2)預かり保育の実施形態
※幼稚園型認定こども園については2号認定子どもを含む。

◯ 従来の私学助成型　◯ 新制度一時預かり事業

(3)通常の教育日数と預かり保育の実施日数（今年度6月の実績値を記入）

6月	日数
教育日数	日
預かり保育実施日数	日

(4)預かり保育の1日あたりの平均人数（今年度6月の実績値を記入）
※小数点１桁まで記入 （以下切り捨て）／例：6.5人
※いない場合は0をご入力ください。

6月	年少	年中	年長
	人	人	人

(5)園児受け入れ開始の時刻（早朝預かりを含む）
※平成30年6月18日～平成30年6月24日の平均の時刻を記入してください。

開始時刻
時 ▾ 分 ▾

(6)預かり保育の終了の時刻
※平成30年6月18日～平成30年6月24日の平均の時刻を記入してください。

終了時刻

時 ▾ 分 ▾

(7)預かり保育担当従事者
・平成30年6月29日の実績値で記入（29日が休園日だった場合は前日の28日で記入）
・専任とは主に預かり保育に関わる業務を担当される方、兼任とは午前中の保育補助など他の業務も担当している方として記入してください。
・常勤はいつもいる方、非常勤は日替りや、ある特定の時間帯のみでパートタイム的な勤務の方として記入してください。
・該当者がいない場合は0をご入力ください。

	幼稚園教諭免許のみ保持者		保育士資格のみ保持者		幼稚園教諭免許・保育士資格両保持者		免許・資格なし		合計	総人数
	常勤	非常勤	常勤	非常勤	常勤	非常勤	常勤	非常勤		
専任職員	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人
兼任職員	人	人	人	人	人	人	人	人	人	

設問3 預かり保育の内容について
※ 参考：幼稚園教育要領解説　第1章　総説　第3節　教育課程の役割と編成等　6　全体的な計画の作成　、第3章　教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項

(1)預かり保育の指導計画や日案の作成（各項目を各段階の中から選んでください）

1.年間指導計画は全体的な計画に位置付けている
◯ 位置付けている　◯ 位置付けていない

2.年間指導計画を作成している
◯ 作成している　◯ 作成中だがまだできていない　◯ 作成していない

3.月案を作成している
◯ 作成している　◯ 作成中だがまだできていない　◯ 作成していない

4.週案を作成している
◯ 作成している　◯ 作成中だがまだできていない　◯ 作成していない

5.日案（週日案を含む）を作成している
◯ 作成している　◯ 作成中だがまだできていない　◯ 作成していない

6.特別な配慮が必要な幼児に対しての個別の指導計画を作成している
◯ 作成している　◯ 作成中だがまだできていない　◯ 作成していない

(2)教育課程に係る教育時間と預かり保育の連携（各項目を4段階の中から選んでください）

1.教育課程に基づく活動と、預かり保育は、1日の生活の流れとして捉えて実施するようにしている

◯ とても重視している　◯ 少し重視している　◯ あまり重視していない　◯ 全く重視していない

例えば（下記の欄に自由記述）

2.教育課程に基づく活動と、預かり保育は計画面で連携するようにしている

◯ とても重視している　◯ 少し重視している　◯ あまり重視していない　◯ 全く重視していない

例えば（下記の欄に自由記述）

3.教育課程に基づく活動から引き継いだ幼児の心と体の健康状態について知った上で預かり保育を実施するようにしている

◯ とても重視している　◯ 少し重視している　◯ あまり重視していない　◯ 全く重視していない

例えば（下記の欄に自由記述）

4.預かり保育での活動内容や心と体の健康状態について、翌日の教育課程に係る教育時間の保育者に引き継ぐようにしている

◯ とても重視している　◯ 少し重視している　◯ あまり重視していない　◯ 全く重視していない

例えば（下記の欄に自由記述）

5.その他、連携で工夫していることがあればご記載ください。

(3)預かり保育での過ごし方（時間の経過で過ごし方が変わる場合等）

1.異年齢で過ごしている

◯ はい　◯ いいえ

2.学年別で過ごしている

◯ はい　◯ いいえ

3.２クラス以上に分けて、生活する集団が大きくならないようにして過ごしている

◯ はい　◯ いいえ

4.学童保育の児童と一緒に過ごしている

◯ はい　◯ いいえ

5.その他の形態で預かり保育を実施している（自由記述）

(4)預かり保育の記録（日誌）の、保育や保護者への活用

1.預かり保育の活動が次の日につながる記録として利用

◯はい　◯いいえ

例えば（下記の欄に自由記述）

2.幼稚園全体の状況などを、預かり担当者へ引き継ぐために利用

◯はい　◯いいえ

例えば（下記の欄に自由記述）

3.安全管理の引き継ぎとして利用

◯はい　◯いいえ

例えば（下記の欄に自由記述）

4.別担当者（学級担任等）への幼児の個別の引き継ぎとして利用

◯はい　◯いいえ

例えば（下記の欄に自由記述）

5.別担当者（学級担任等）への幼稚園の全体の状況などの引き継ぎとして利用

◯はい　◯いいえ

例えば（下記の欄に自由記述）

6.預かり保育の内容や幼児の様子を保護者に伝えるために利用

◯はい　◯いいえ

例えば（下記の欄に自由記述）

7.幼児の個別の特記事項を保護者へ伝達するために利用

◯はい　◯いいえ

例えば（下記の欄に自由記述）

8.その他

(5)預かり保育の実践上の配慮事項（各項目を4段階の中から選んでください）

1.幼児がゆったり落ちついて過ごせるように配慮している

◯ とても重視している　◯ 少し重視している　◯ あまり重視していない　◯ 全く重視していない

例えば（下記の欄に自由記述）

2.幼児が自らしたい遊びを選択して過ごせるように配慮している

◯ とても重視している　◯ 少し重視している　◯ あまり重視していない　◯ 全く重視していない

例えば（下記の欄に自由記述）

3.その日の生活の流れ（静・動）に配慮している

◯ とても重視している　◯ 少し重視している　◯ あまり重視していない　◯ 全く重視していない

例えば（下記の欄に自由記述）

4.幼児の年齢や体調を考えて翌日も元気に過ごせるように配慮をしている

◯ とても重視している　◯ 少し重視している　◯ あまり重視していない　◯ 全く重視していない

例えば（下記の欄に自由記述）

5.その他 特に配慮していることがあれば、下記の欄に記入してください

(6)預かり保育における家庭との連携（保育や育児関係）（各項目を4段階の中から選んでください）

1.園内掲示

◯ とても重視している　◯ 少し重視している　◯ あまり重視していない　◯ 全く重視していない

2.紙面でのお知らせ（おたより等）

◯ とても重視している　◯ 少し重視している　◯ あまり重視していない　◯ 全く重視していない

3.ｗｅｂやアプリケーション（お知らせ等）

◯ とても重視している　◯ 少し重視している　◯ あまり重視していない　◯ 全く重視していない

4.登降園時の保護者との会話

◯ とても重視している　◯ 少し重視している　◯ あまり重視していない　◯ 全く重視していない

5.預かり保育に保護者が参加する機会や場の提供（参観、親子で遊ぶ場、子育て広場、子育て相談など）

◯ とても重視している　◯ 少し重視している　◯ あまり重視していない　◯ 全く重視していない

6.家庭での学びの支援（絵本や歌詞・楽譜、レシピなど、家庭でできる活動を支援する資料の貸し出しなど）

◯ とても重視している　◯ 少し重視している　◯ あまり重視していない　◯ 全く重視していない

7.その他の取り組みがあればご記入ください。
またとても重視している取り組みの詳細についてお知らせください。

(7)預かり保育において、地域の人や施設との出会いや関わり等（長期休業中の預かり保育で実施していることを含む）（各項目を4段階の中から選んでください）

1.小学校・中学校など地域の異年齢の幼児・児童などとの交流

◉ とても重視している　○ 少し重視している　○ あまり重視していない　○ 全く重視していない

2.高齢者を含む地域の人々との交流

○ とても重視している　○ 少し重視している　○ あまり重視していない　○ 全く重視していない

3.地域の行事への参加

○ とても重視している　○ 少し重視している　○ あまり重視していない　○ 全く重視していない

4.地域の人とのつながりの活用（民話や伝承遊び、ボランティアの方々に来ていただく）

○ とても重視している　○ 少し重視している　○ あまり重視していない　○ 全く重視していない

5.地域の場の活用（園外に出かけて、公園・公民館・図書館・美術館・小学校・中学校などの施設の利用）

○ とても重視している　○ 少し重視している　○ あまり重視していない　○ 全く重視していない

6.その他の取り組みがあればご記入ください。
またとても重視している取り組みの詳細についてもお知らせください。

(8)自園の預かり保育で大切にしている点や、質を改善するために工夫している点など

※預かり保育の内容や体制などについて、改善や工夫してきた点などもご記入ください。

(9)（8）の取り組みを実施した良さや効果をご記入ください。

(10)預かり保育で課題と思っている点や困っていること、これから取り組みたいことなど何でも箇条書きでご記入ください

今一度入力内容について
ご確認の上、下記の送信ボタンを押してください。

以下の「アンケートの回答を送信する」ボタンをクリックすると回答を送信します。
送信前に回答内容に間違えがないか確認してください。

アンケートの回答を送信する

Page top

■家庭教育や地域の教育との関わりを踏まえた教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動の在り方に関する研究検討委員会

東　　重満	北海道・美晴幼稚園
宮下友美惠	静　岡・静岡豊田幼稚園
加藤　篤彦	東　京・武蔵野東第二幼稚園
岡本　和貴	徳　島・わかくさ幼稚園
川原恒太郎	大　分・ひまわり幼稚園
青木　賢亮	北海道・慈恵ひまわり幼稚園
千葉　亮子	山　形・尾花沢幼稚園
杉森　信幸	千　葉・めぐみ幼稚園
佐藤　緑郎	埼　玉・大宮みどりが丘幼稚園
杉本　育美	東　京・光明幼稚園
青木　洋子	長　野・南長野幼稚園
村手　　敦	愛　知・九品寺幼稚園
熊谷　知子	京　都・泉山幼稚園
水原　紫乃	広　島・焼山こばと幼稚園
淵　　和子	福　岡・霧ヶ丘幼稚園
吉井　　健	鹿児島・認定こども園信愛こどもの園
岡本　潤子	青　森・千葉幼稚園
亀ヶ谷忠宏	神奈川・宮前幼稚園
平林　　祥	大　阪・ひかり幼稚園
秦　　賢志	兵　庫・はまようちえん

■協力者

箕輪　潤子	武蔵野大学教育学部こども発達学科准教授
齋藤　慈子	上智大学総合人間科学部心理学科准教授

本報告書は、文部科学省の「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」の委託費による委託業務として、公益財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構が実施した平成３０年度幼児期の教育内容等深化・充実調査研究の成果を取りまとめたものです。したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承諾が必要です。